

An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji*, 5

Yosuke KAWAKAMI

Department of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

ある。また、金を納めているため、銅銭の汚れた臭いがするのである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(二二丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部(第四九話、一二丁表裏)。○酸臭[suān chòu]＝酸っぱくて、臭い。「酸」「臭」は「すっぱい」「くさい」という意味の形容詞。現代中国語と同じ。○搏[bō]＝「捕まえる」意の動詞。左訓「トラヘル」(捕らえる)。○滋味[zīwèi]＝味、味わい。現代中国語と同じ。日本語「滋味」とはニュアンスが微妙に異なる。○上半截[shàng bànjié]＝上の半分。ここでは「上半身」のこと。左訓「コシヨリカミ」(腰より上)。○下半截[xià bànjié]＝下の半分。ここでは「下半身」のこと。左訓「コシヨリシモ」(腰より下)。○究竟[jīng]＝結局のところ、つまりは。現代中国語と同じ。左訓「オシツマリ」。○何等[héděng]＝どのような、どんな。○納監[nà jiān]＝「納粟入監」の制度を利用して科擧の受験資格を手に入れた学生のこと。第五七話「納粟詩」の注に詳しい。左訓「ゼニヲ、サメタノタ」(金を納めたのだ)。○酸氣[suānqì]＝貧乏書生らしいケチ臭さ。また、耳で聞いても分からないような中国語の「書き言葉(文言)」を、これ見よがしにインテリぶって、ひけらかそうとする嫌味っぽさをも言う。ただし、文字通りの意味としては、「酸っぱい雰囲気」「酸っぱいムード」。○納粟[nà sù]＝(多くは賄賂として)金銭を納めること(前出)。○銅臭[tóngchǒu]＝銅の臭い。強欲で金に汚い人間を風刺するときによく用いられる。

補注

この話は、『笑府』巻一古艶部(第二二話「酸臭」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』(岩波文庫、一九八三年一月、二四頁)を参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。

『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文との間には、僅かに文字の異同がある。

『笑府』第二二話(巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、六丁表裏)

酸臭

小虎謂老虎曰。今日吃一箇人。滋味甚異。上半酸。下半臭。是何人也。老虎曰。此必秀才納粟者。

近來監生行事。都兼帶酸氣。只合喚作醜醋耳。『韻音義』

又一秀才畏考。援例。堂試日。至晚不成篇。乃大書

卷面曰。惟其如此。所以如此。若要如此。何必如此。

堂官見之。笑曰。寫得出此四句。畢竟還是箇附例。

余説

本話は、「納粟入監」の制度を利用して学生の身分を手に入れた科擧受験生を揶揄した話である。

第五七話「納粟詩」には、このような学生を嘲笑した、手の込んだ「歇後詩」が収録され、第五九話「咬飛刃」には、金にまみれた学生の、小粒銀のような耳にガブリと噛みつくという話が収められており、また第六〇話「入場」には、金まみれの学生は豚のウンチのように臭いという話を取り上げられていた。

そして、この第六七話「酸臭」では、なんと本当に学生を食べてしまったトラの口から、金にまみれた人間の味は「酸っぱくて、臭い」「酸臭」と言わせているのである。

中国語では、書生がインテリぶって難しい言葉(文言)を弄する嫌味な様子を「酸氣[suānqì]」があると言い、金銭に目がない汚れた人間を「銅臭[tóngchǒu]」があると言って罵倒する。ここでは、学問もなくせに金の力で学生の身分を手に入れた「どら息子」たちを、「酸臭[suān chòu]」(インテリぶっていて、なおかつ金に汚い強欲な奴)と言って馬鹿にしているのである。

(附記)

本稿は、平成三〇年度科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号一七K〇二四五六「東アジアの笑話と日本語・日本文学に関する複合的研究」)による研究成果の一部である。

る)。○崙 [shǐ] 〓 そのとき。「崙」は「時」の異体字。中国原本(同前京大本)は「時」に作る。○公幹 [gōnggàn] 〓 公務、公用。左訓「ゴヨウ」(御用)。○候究 [hóujiū] 〓 (待合室や控室で) 待つ。ただし、中国資料の用例未詳。左訓「サシヒカヘサスル」(差し控へさする)。○牌 [pái] 〓 板で作られた立て札のこと。左訓「キハイ」(位牌)。中国原本(同前)は「碑」に作る。「碑 [Dēi]」は「(墓石のような) 石碑」のこと。○驚詫 [jīngchà] 〓 驚き怪しむ、不思議に思い、びっくり仰天する。左訓「トウテンシテ」(動顛して)。○嗚咽 [wūyè] 〓 むせび泣く、すすり泣く、しくしく泣く。左訓「シクシクナイテヲル」(しくしく泣いてをる)。○先人 [xiānrén] 〓 亡くなった父親のこと。○靈座 [língzuò] 〓 死者の遺体を安置するための台。左訓「キハイ」(位牌)。○親物傷情 [dù wù shāng qíng] 〓 故人に縁のある物を見て、亡き人のことが思い出され、悲しい気持ちがよくえつてくること。亡き人を偲ぶ気持ちが激しいことの形容。『醒世恒言』第一卷「両県令競義婚孤女」に「今雖年久。尚然記憶。親物傷情。不覺哀泣。」(今や長い年月が経過してはおりますが、まだあの時のことが記憶に残っており、縁のある物を目にして亡き人のことが思い出されて悲しい気持ちがよみがえり、思わず涙が流れてしまいます。(拙訳)とある。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

この話も、国子監こくしかんの学生の無知を嘲笑あざわらったものである。財産が豊かにあり、文字が読めない学生というからには、間違いなく、やはりこの学生も「納粟入監」の制度を利用し、お金だけで学生の身分を手に入れた輩やからである。

本話の主人公である齊君せいきんは、形が似ている二種類の文字を読み間違えた。一つ目は、「兎 [tù] (つゝぎ)」と「免 [miǎn] (免除する)」。二つ目は、「齋戒 [zhāi jiè]」と「齊成 [Qí Chéng]」である。

一つ目の文字の読み間違いによって、齊君せいきんは府知事に捕らえられ、二つ目の読み間違いによって、今度は死んでもいない父親「齊成さいせい」氏の死を、大声張り上げて嘆き悲しむことになる。

いずれの文字も、確かに形はよく似ているが、基本的な語彙力と、常識的な判断力さえあれば、つまり「バカ」でさえなければ、この程度の漢字を読み間違えるはずはない。この話を通して、『笑林広記』の編者・遊戯主人の伝えたかったことは、「(金)の力で入学した」国子監こくしかんの学生はバカである」ということであろう。

⑥7 酸臭さんしゅう(すっぱくて、くさい)

原文

酸臭

小虎謂老虎曰。今日出山。搏得一人。食之。滋味甚異。上半截ハ酸也。下半截ハ臭也。究一竟不知是何等ノ人。老虎曰。此必是秀才ノ納監者。學生乃有酸氣。納粟則有銅臭。」

書き下し文

酸臭

小虎 老虎に謂て曰く。今日 山を出て。一人を搏し得て之を食ふ。滋味 甚だ異なり。上半截は酸なり。下半截は臭なり。究竟 知らず是何等の人ぞ。老虎 曰く。此 必ず是 秀才の納監する者なり。

「学生 乃ち 酸氣 有り、粟を納むるときは 則ち 銅臭 有り」

現代語訳

子どものトラが、大人のトラに言った。

「今日ね、山を出て、人間を一人捕まえて食べたんだけど、その味がとっても変だったの。上半身は酸っぱくて、下半身は臭いの。結局のところ、どういう人間だったのか、さっぱり分からないわ。」

大人のトラは言った。

「それはな、きっと、金の力で学生の身分を手に入れた秀才だったのであろう。」

【和刻本割注】学生には、貧乏くさい酸味と、知識をひけらかそうとする嫌味が

書き下し文

斎戒庫

一監生姓は齊。家資甚だ富む。但だ字を識らず。一日府尊票を出し鶏二隻。兎一隻を取る。皂亦票中の字を識らず。齊監生に央で看せしむ。生曰く。鶏二隻を討むるも、一隻を取らず。皂只一鶏を買ふて回す。太守怒て曰く。票上に鶏二隻。兎一隻を取るとす。為何ぞ只一鶏を繳す。皂監生の事を以て稟す。太守遂に監生を拘し来て問す。時に太守適たま公幹有り。暫く監生を將て斎戒庫内に收入して究を候す。生庫に入て。牌上の斎戒の二字を見て。認て他が父親齊成の姓名と做し。目を張り驚詫し。嗚咽して止まず。人何の故ぞと問へば。答て曰く。先人の靈座を。何人か設建して此に在る。物を観て情を傷む。焉んぞ哭せざるを得ん。

現代語訳

ある国子監の学生、名字を齊と言った。財産は豊かであったが、文字が読めない。ある日、府知事が「鶏を二羽、兎を一羽（鶏一隻。兎一隻）」、差し出さない」という証文を発行した。官庁の下級役人は、これまた証文の文字が読めなかったので、国子監の学生である齊君に頼んで読んでもらうことにした。齊君は言った。

「鶏を二羽持つてこい、ということじゃが、一羽は免除す（鶏一隻。兎一隻）」とあるぞ。（訳者注、「兎 [tù] (うさぎ)」という文字を「免 [miǎn] (免除する)」に読み間違えているのである。）

（文字が読めるに違いない学生の齊君が、そのように教えてくれたので）官庁の下級役人は、鶏を一羽だけ買って、府知事にそのように（御所望の品を御用意いたしました）と申し上げた。（それを聞いて）府知事はカンカンに怒り、こう言った。

「証文には、鶏を二羽、兎を一羽、差し出さない、と書いてあるのに、どうして鶏を一羽しか差し出さないのじゃ。」

官庁の下級役人は、国子監の学生に教えてもらった事のいきさつを（洗いざらい）御報告申し上げた。そして、府知事は、この学生を捕まえ、尋問することにしたのだが、ちょうどそのとき、公務のために（どうしてもその場を離れなければならなくなり）、しばらくの間、学生を「斎戒庫」という精進潔斎するための部屋に入れ、そ

こで待たせておくことにした。

学生の齊君は、その部屋に入り、石碑の表面に「斎戒」という二文字が刻されているのを見て、それが自分の父親の名前「齊成」であるかと思ひ、かつと大きく眼を見開き、びっくり仰天、しくしくしく、いつまでもむせび泣き出してしまふ始末。そこで、「どうしてそんなに泣いているのですか」と聞いてみたら、齊君は、こう答えた。「亡き父上様の御遺体を安置する台座を、どなたがここにお作りになったのでございましょう。このようなものを目にしては、今は亡き、かの父上様のことが偲ばれてなりません。どうして声を上げて泣き叫ばずにいられましょう。わああ。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・古艶部（二一丁表裏）。『新鐫笑林広記』卷之一・古艶部（第四七話、一〇丁裏―一二丁表）。○齋戒庫 [zhāi jiè kù] = 齋戒を行うための部屋。「斎戒」は、仏教の儀式（祭祀）に先立ち、身を清めること。「八關齋戒 [bā guān zhāi jiè]」ともいう。なお、「八戒」とは「殺生をしない」「盗みをしない」「性行為をしない」「嘘をつかない」「酒を飲まない」「正午以降は食事をしない」「歌舞音曲に触れない」「大きなベッドで寝ない」こと。「齋」は「斎」の本字。本文中の左訓に「モノイミヘヤ」（物忌み部屋）とある。○家資 [jiā zī] = 一家の財産、身代。「家産 [jiā chǎn]」「家財 [jiā cái]」と同じ。左訓「シンダイ」（身代）。○府尊 [fǔ zūn] = 知事に対する尊称。左訓「ブギヤウ」（奉行）。○出票 [chū piào] = 役所が（物品等の請求をするための）正式文書を発行すること。和刻本は、「票」に左訓「カキツケ」（書付）を附す。○皂 [zào] = 官庁の下級役人をいう。「皂隸 [zào lì]」と同じ。左訓「アシガル」（足軽）。「足軽」は、江戸時代における最下層の武士。○央 [yāng] = 頼む、お願いする、懇願する。右傍訓「タノンテ」（頼んで）。○囑話 [hù huà] = （目下の者が目上の人に）返事をする、申し上げる。「囑」は「回」の異体字。中国原本（乾隆二十六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵）は「回」に作る。○太守 [tǎi shòu] = 官職名、府知事の別称。もとは一郡の長官を指す語であったが、宋代以降、郡を府と改称したため、府知事のことを「太守」とも呼ぶようになった。○繳 [jiāo] = 納める、上納する、差し出す。左訓「サシアケル」（差し上げる）。○稟 [lǐng] = （目下の者が目上の人に）申し上げる、上申する。左訓「モウシアケル」（申し上げ

和刻本は、「相」の「目」の部分で「𠂔」に作る。左訓「ト、サマ」(父様)。○談論「tánlùn」
 〓非難する、あれやこれやと議論する。○進身「jìnshēn」〓官職に就く、役人になる、
 立身出世する。左訓「リツシン」(立身)。○稱呼「chēnghū」〓呼び方、呼称。「稱」
 は「称」の正字。○眷侍教生「juàn shì jiào shēng」〓謙遜の気持ちを表すための自称。
 手紙の末尾、自分の名前の上に記された。「眷」は「親類」「姻戚」の関係にあること
 を示し、「侍」は「目上の人に」お仕えする」という謙虚な気持ちを添える。「教」
 は「(目上の人に) 教えを受ける」意、「生」は、相手から見て、自分が「門生」「学生」
 であることを意味する。明代の白話小説『西遊補』第一一回に「眷侍教門生 十三宮
 總作頭 沈敬南 百拜」とある。これは、沈敬南^{しんけいなん}という人物が手紙の末尾に記した自
 署名である。「眷侍教生」という語は、あくまでも目上の人に対する謙称として用い
 られるものであり、目上の人への宛名として使用する尊称ではない。父親に対して用
 いるのは、文法的にも礼儀の上からも、いずれも誤りである。なお、和刻本の「眷」
 という文字は一画(上部の横棒が)多い。誤刻であろう。○罷「pà」〓文末に用いら
 れ、相手の同意を求めるニュアンスを添える語気助詞(「〜」ということにしよう
 よ)。現代中国語「吧」[ba]に相当する。右傍訓「モカラン」。○斟酌「zhēnzhào」
 〓熟慮する、思案を重ねる。○切當「qièdàng」〓ぴったりである。適切である。「當」
 は「当」の正字。○延師「yán shī」〓師を招く、先生を招聘する。○不通「bù tōng」
 〓分かっていない、事理に通じていない、ちんぷんかんぷんである。「一竅不通」
 「qiào bù tōng」〓言う。左訓「モンモウナルヲ」(文盲なるを)。○嫌「xiān」我カ太
 妄「ワ」〓私が余りにもデタラメであるのに腹を立てた(のであろう)。左訓「メツッ
 ウナルライヤカルナラン」(滅相なるを嫌がるならん)。「滅相」は「滅茶苦茶」であ
 ること。○晩生帖児「wǎnshēng tiē」〓清代中国の官界(官吏の世界)において使用
 された招待状(名帖)の一つ。自分よりも少しだけ地位の高い相手に送るときに用
 いられた。「晩生」は「(相手より) おそく生まれた(後輩)」意。「帖」は「招待状」「書
 状」のこと。「児」は、名詞の語尾に添えられる接尾辞(中国北方方言に多く見える)。
 清代の白話小説『緑野仙蹤』第二回に「我早已想及於此。但他是個現任中書。我是個
 秀才。又年少。不好與他眷弟帖。寫個晩生帖。我心不願意。」(私も以前からそのこと
 は気になっていたのですが、あの人は現役の中書(官職名)であるのに対して、私は
 一介の科挙受験生、しかも年下でありますから、同年配の相手に送るような手紙を出

すわけにもいきませんし、かといって、目上の人に送るような「晩生帖」を出すな
 どという気分にもなれないのです。(拙訳)とある。○「與姻戚同輩之人則稱眷侍教
 生、凡與平等年長之人則稱晩生」〓この割注は、遠山荷塘による訳注であり、中国刊
 本にはない。原本には訓点が付されていないため、私に訓読した。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

引き続き、「監生(国子監の学生)」の無知を馬鹿にした話である。具体的には、
 「眷侍教生「juàn shì jiào shēng」」「晩生「wǎnshēng」」という謙称を、父親に対す
 る尊称として使ってしまった愚かさを笑っている。

自分のことを控えめに言うための謙遜の辞を、目上の人に対する尊敬語として使用
 してしまうことは、現代の日本人にも、ときどき見られる現象である。例えば、「い
 ただく」という語は謙讓語であり、自分の行為にしか使えない表現だが、目上の人に
 向かって「どうぞごゆつくり、いただいてください」などと言ってしまふ類いである。
 敬語表現が苦手な人にとっては、他人事ではない話かもしれない。

齋戒庫(精進潔斎するための部屋)

原文

齋戒庫

一 監生姓齊。家資甚富。但、不識字。一日府尊出票取難二隻。兔
 一隻。皂亦不識票中ノ字。央齊監生看。生日。討難二隻。免二
 隻。皂只買一難。回話。太守怒曰。票上二取。難二一隻。為何。何
 只繳一難。皂以二監生ノ事。稟。太守遂拘監生來問。豈太守適、有
 公幹。暫將二監生。收。入。齋戒庫。內。候究。生入庫。見二牌。上。齋戒
 二字。認做。他。父。親。齊。成。姓。名。張。目。驚。詫。嗚咽。不。止。人。問。何。何
 故。答曰。先人靈座。何人設建在此。觀。物。傷。情。焉。得。不。哭。哭。

「親子の間で、どうして招待状などを送る必要がありますか。（そんなことをしたら）人に馬鹿にされるのではないでしょうか。」

すると、学生は言った。

「そんなことはない。今日は、官吏に採用された（記念すべき）最初の一日である。他の客人たちには、みな御挨拶申し上げたのに、どうして私を生んでくれた実の親に対して御挨拶申し上げないなどという道理があるのか。」

召使いは、次のように質問した。

「それでは、（父上様に対して）どのような呼び名を使えばよろしいでしょうか。」

学生は、いろいろ考えあぐねた末に、こう言った。

「うむ、（父上様に対する宛名は）『眷侍教生 [juàn shì jiào shēng]』とでも書いておこうか。」

父親は、それを見てカンカンに怒り、息子を叱りつけた。学生は言う。

「この呼び名は、熟考の末に選んだもので、父上様にぴったりのものです。父上様御自身には、お分かりにならないだけです。父と息子とは、もともと近い肉親です。だから、（親類関係を意味する）『眷』という一字を附したのです。（「お仕える」という意味の）『侍』というのは、『父は腰を下ろし、息子は立つ』という意味です。『教』という字は、私が幼いときから家庭教師を雇い、（私に立派な）教育を授けてくださった、という意味です。そして、『生』という字は、父上様と母上様が私を生んでくださった、という意味なのです（いずれも礼儀になっっているでしょう）。」

父親は、（それを聞いて）ますます激しく怒り狂い、息子が言葉の意味をまったく理解していないことを責め立てた。

学生は、召使いに言った。

「どうやら父上様は、私が勝手に『眷侍教生』などという言葉を使ってしまったことが気に入らなかったらしいな。それならお前、他のやつ（後輩が先輩に送ったり、学校の先生が県知事に送ったりする、少し地位の高い人に対して使用する招待状）『晩生帖』にでも取り替えてきておくれ。」

【和刻本割注】（手紙や招待状を）姻戚関係にある人や同世代の相手に送るときは（相手の呼び名を）「眷侍教生」とし、一般に、社会的地位が対等であり、

年齢が自分よりも上である相手に送るときは（相手方の呼び名を）「晩生」とする。

【訳者注】和刻本の割注に記されている遠山荷塘の説明は、現在知られている清代中国の歴史的事実とは異なる。「眷侍教生」も「晩生」も、差出人である自分の名前の右上に書き添える謙称（謙遜の気持ちを込めた自称、無理に訳せば「教え子の○○」「後輩の○○」「愚弟」など）であり、相手の名前を呼ぶときの尊称ではない。目上の存在である父親に「私の教え子である父上様」「私より後に生まれた父上様」などと呼びかけるのは、言うまでもなく無礼であり、同時にまた、馬鹿げている。この話に出てくる、学識も教養も常識もない、無知な学生の勘違いも、そのことを理解しなければ笑えない。また、そのような呼び名を目にしたときの父親の憤り、そして、そのような馬鹿息子を育ててしまった情けない気持ちも、推して知るべしである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（二〇丁裏～二二丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第四四話、一〇丁表）。○援例入監 [yuàn lì rù jiàn] = 納粟入監（お金を納めて国子監に入る意）の制度（条例）を利用して、最高学府「国子監」に入学すること。『警世通言』第三卷「杜十娘怒沈百宝箱」に「以此宦家公子。富室子弟。到不願做秀才。都去援例做太學生。」（そのために、役人や金持の子弟は、秀才（府県学の学生）にはなろうとしないで、みんなこの制度を利用して太学生（国学の学生、監生）になった。）（前出「中国古典文学大系」第三七巻『今古奇観（上）』六〇頁）という用例がある（第五七話「納粟詩」参照）。○吩咐 [fēn fù] = （～に）を、言いつける。現代中国語と同じ。左訓「イヒツケ」（言ひ付け）。○家人 [jiā rén] = 召使い、下僕。左訓「ケライ」（家来）。○備帖 [bèi tiē] = 招待状を準備する。「帖 [tiē]」は、「名帖 [míng tiē]」（名札、名前を記した小紙片）、「請帖 [qǐng tiē]」（招待状）」の意。左訓「ナフダラカキ」（名札を書き）。○老相公 [lǎo xiāng gōng] = 上流社会における年配の男性に対する尊称。「相公」は「若旦那」「旦那さま」の意（第八話「楊相公」参照）。

でも分からぬ)は「連自不識」の和訳、左訓「モジマテモシラヌ」(文字までも知らぬ)は「連字不識」の和訳である。なお、中国原本(乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵)は、「不識」という文字の前に一文字分の空欄があり、中国で刊行された別本(光緒五年(一八七九)刊『新刻笑林廣記』(粗悪本))は「連句疑 不識」(意味不明。「疑」と「不」の間に一字分の空欄がある。)となっており、また別のテキスト(豊橋創造大学蔵、刊年未詳、善成堂刊本)は「連自身都不識」とし、中国で出版された翻刻『笑林廣記二種』(廖東輯校、齐鲁書社、一九九六年、一二頁、底本は乾隆四十六年(一七八二)書業堂刊、廖東氏蔵本)は「連自「字同」多不識」(「内は割注」とする)。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

中国語によるダジャレを使って、妻が「監生」である夫を小馬鹿にする話である。

「自[zì]」と「字[zì]」は、現代中国語でも全くの同音である。「連自不識」[lián zì bù shí] (自分のことすら分らない) という言葉は、耳で聞いた場合、「連字不識」[lián zì bù shí] (文字すら読めない) という意味をも合わせ持つ。

また、この「監生」の妻の態度からは、「文字すら読めない(連字不識)」ことこそが、「監生」(最高学府「国子監」の学生)の特徴だと思っているかのように受け取れるところが、実におかしい。「監生になったおかげで、自分のことすら分からなくなつたのかい」という妻の言葉は、「納粟入監」の制度を利用して学生の身分を買ったおかげで、文字すら読めないバカな学生の仲間入りをする事になったのね」とでも読み替えるべきかもしれない。

いずれにせよ、この話は、教養がないどころか、文字すら読めない、おかしい学生が溢れかえっていた当時の中国社会を辛辣に風刺したものである。

⑥監生拜父(国子監の学生が、父親に御挨拶申し上げる)

原文

監生拜父

一人援例ヲ入監。吩咐家人備帖拜老相公。僕曰。父子如何用帖。恐被二人談論。生曰。不然。今日ハ進身之始。他客俱不拜。焉有親父不拜之理。僕問用何。稱呼。生沈吟曰。寫个個眷侍教生罷。父見怒責之。生曰。稱呼斟酌切當也。你自不解。父子一本至親也。故下眷字。侍者。父坐。子立也。教者。從幼延師教訓。生トハ者。父母生也。我トハ父怒。轉盛也。責其不通。生謂僕曰。想是嫌我太安了。你去另換過晚生ノ帖兒來罷。

「與姻戚同輩之人 則稱眷侍教生、凡與平等年長之人 則稱晚生」

書き下し文

監生 父を拜す

一人例を援き、監に入る。家人に老相公を拜せんと吩咐す。僕曰く。父子如何ぞ帖を用ん。恐くは人に談論せられん。生曰く。然らず。今日は進身の始め。他客も俱に拜す。焉んぞ親父を拜せざるの理有ん。僕何の称呼を用んと問ふ。生沈吟して曰く。個の眷侍教生と書くがよからん。父子は一本の至親なり。故に一の眷字呼。斟酌切當なり。你自ら解せざらん。父は一本の至親なり。故に一の眷字を下す。侍とは。父坐し子は立つなり。教とは。幼より師を延き教訓す。生とは。父母我を生むなり。父怒り転盛なり。其の不通を責む。生僕に謂て曰く。想ふに是我が太だ安了を嫌ふならん。你去て別に晩生の帖兒に換へ過し來れよ。「姻戚同輩の人に与ふるときは、則ち眷侍教生と称す、凡そ平等年長の人に与ふるときは、則ち晩生と称す」

現代語訳

ある男、(金銭を納めることによって学生の身分を手に入れることができるという)「納粟入監」の制度を利用して、国子監に入学した。この男は、父上様にも御挨拶したいので、招待状を送るように、召使いに言いつけた。召使いは、言った。

⑥4 自不識 (自分のことが分からない＝字が読めない)

原文

自不識

有_二監生_一穿_二大衣_一。帶_二圓帽_一。于_二着_一衣鏡_一中_一自照_レ。得意_レ甚_シ。指_レ謂_二妻_一曰_ク。你看_二鏡_一中_一是何_レ人_一。妻曰_ク。臭_一烏_一龜_一。虧_二你_一做_二了_一監生_一。連_二自_一。[字_一全]

書き下し文

自識らず

監生_{かんせい}有_あり。大衣_{たいい}を穿_{うが}ち。円帽_{えんぼう}を帶_おび。着_{ちやく}衣鏡_{いきやうちゆう}中_{ちゆう}に自_{みづか}ら照_{てら}し。得意_{とくい}甚_{はなはだ}し。指_{ゆびさ}して妻_{つま}に謂_{いは}て曰_{いは}く。你_{なんぢ}看_みよ。鏡_{きやうちゆう}中_{ちゆう}に何_{なん}人_{ひと}ぞ。妻_{つま}曰_{いは}く。臭_{しう}烏_う龜_{きつ}。你_{なんぢ}が監生_{かんせい}と做_されう_を虧_かて。自_じ「字_じと同_{おな}じ」まで識_しらず。

現代語訳

中国式の長くて大きな官服を身にまとい、円い帽子を被っている国子監の学生が、姿_{すがた}見_みに自分の全身を映し、得意満面になっていた。そして、(鏡に映った)自分の姿を指_ささして、妻に向かつてこう言った。

「ほらお前、見てごらん、鏡の中にいるのは、誰でしょう。」

妻は言った。

「このクソバカ野郎め。国子監の学生になったおかげで、自分のことすら分からなくなったのかい(＝国子監の学生になったおかげで、文字すら読めなくなったのかい)。」

【訳者注】妻の最後の一句「連自不識 [lián zì bù shí] (自分のことすら分からない)」

い)は、「連字不識 [lián zì bù shí] (文字すら読めない)」という言葉と、全くの同音である。妻の気持ちとしては、「国子監の学生」「文字すら読めない」という思い込みがあったものと思われる。ただし、もちろん本来は、国子監の学生ならば、文字が読めないなどということは、通常ありえないはずだが、明清時代には「納粟入監」の制度により、お金で学生の身分を買うこともできたため、このように碌に文字の読めない科擧受験生(監

生)が大勢存在していた、ということであろう。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(二〇丁表裏)。「新鐫笑林広記」巻之一・古艶部(第四三話、九丁裏)一〇丁表。○自不識 [zì bù shí]＝「自分のことが分からない」という意味だが、「自 [zì]」と「字 [zì]」が同音のため、「字不識(字が読めない)」という意味にも聞こえる。このタイトルは、その二つの意味を合わせた掛詞となっている。○穿 [chuān]＝(服を着る。現代中国語と同じ。漢文訓読語「うがつ(穴を空ける)」とは全く意味が異なる。○大衣 [dà yī]＝明清時代の男性用の官服。幅が広くて長い上着、綿入りの中国服。「袍服 [páo fú]」「長袍 [cháng páo]」とも言う。○圓帽 [yuán mào]＝円い帽子。「圓」は「円」の正字。科擧の一次試験に合格した「秀才」が「方巾 [fāng jīn]」と呼ばれる四角い帽子を被っていたことについては前に述べたが(第一一話「無一物」等)、「大衣」「袍服」「長袍」という長いガウンを身につけたときには、円い帽子を被った。清朝末期の中国服(「長袍」「圓帽」)の様子は、今でも当時の写真によって知ることができる。左訓「マルボウシ」(円帽子)。○着衣鏡 [zhuó yī jìng]＝姿見、全身を映す鏡、服を着るときに自分の姿を映すための鏡。「穿衣鏡 [chuān yī jìng]」とも言う。左訓「スガタミカミミ」(姿見鏡)。○你看 [nǐ kàn]＝(あなた、ほら)見てごらん。現代中国語と同じ。○臭烏龜 [chòu wū guī]＝バカ野郎(罵語)。「臭」は、名詞の前につけ、相手を蔑む気持ちを添える語。「烏龜」は、本来は動物の「カメ(亀)」の意だが、罵語として「妻を寝取られた男(妻の手綱を引くこともできない、情けない、間抜けな男)」、または単に「バカ野郎」という意味で用いられる。ここでは、妻が夫を罵る言葉(「バカ野郎」として使用されている。左訓「クソアホウ」(糞阿呆)。○虧 [kuī]＝(幸いにも)～のおかげで。現代中国語と同じ。左訓「オカケデ」(御蔭で)。○連_二自_一「字全」不識＝自分のことすら分からない。○「全」は「同」の異体字。割注部分は、「自 [zì]」(自分のこと)と「字 [zì]」(文字)の発音が同じであることを注記したものの。この割注は中国原本にある原注である。「連 [lián]」は「～までも」「～さえ」という意味を表す前置詞(介詞)。すぐ前の第六二話「監生娘」では「マデ」という右傍訓が附されていたため、ここには送り仮名が附いていないが、「マデ」と訓読しておく。右傍訓「シブンマデモワカラヌ」(自分ま

「言い争う、論争する。中国刊本（京大本）も和刻本も「争辨」とするが、正しくは「争辯」[zhēngbiàn]。〇往 [wǎng] = 「(の)方向へ」向かって」「へ」という意味の前置詞（介詞）。現代中国語と同じ。右傍訓「ムカフテ」（向ふて）。〇一大第門首 [yī dà dì ménshǒu] = 「一の大きな邸宅の門前（玄関先）。左訓「トアルオホキナヤシキノカド」（とある大きな邸の門）。〇匾 [biǎn] = 大きな屋敷の入り口、寺院の大門、庭園の亭、大広間などに掛けられた横長の板（第五〇話「進士第」に前出）。左訓「ガク」（額）。〇大中丞 [dà zhōng chéng] = 明清時代の官職名。地方の民政・軍政を司った長官の呼称。中央政府から地方に派遣された。〇倒看 [dǎo kàn] = 逆さまに読む。近代以前の中国および日本では、横書きの文字は右から左に書かれたが、それを「逆さまに読む」つまり「左から右へ読む」こと。「看」は「見る」ではなく「（文字や書物を）読む」意。現代中国語と同じ。〇丞中大 [chéng zhōng dà] = 官職名「大中丞」を逆さまに読んだもの。本来は無意味だが、「城中大 [chéng zhōng dà]」と同音のため、音読した場合には「都会は立派である」意に聞こえる。左訓「城中オホキナ」（城中、大きな）。〇徵驗 [zhēng yàn] = 証拠。「驗」は「験」の本字。左訓「シルシ」（験）。〇是 [shì] = 「〜である」意を表す動詞。現代中国語と同じ。右傍訓に「ハ」とあるが、漢文訓読における通常の読み方「コレ」に従う。漢文訓読では「コレ」と音読し、「である」という意味で理解するのが普通だからである。〇大理卿 [dà lǐ qīng] = 官職名。犯罪者の審判、処罰を司る。〇倒念 [dǎo niàn] = 逆さまに読む。「念」は「声に出して音読する」意の動詞。現代中国語と同じ。〇郷裏大 [xiāng lǐ dà] = 官職名「大理卿」の三字を、「卿」を形の似ている別字「郷」に置き換えて、逆さまに読んだもの。本来は無意味だが、「郷理大 [xiāng lǐ dà]」と読めば、「理」と「裏」が同音のため、「郷裏大 [xiāng lǐ dà]」（田舎が立派である）」という意味に聞こえる。左訓「オホキナ」（田舎が大きな）。〇大士閣 [dà shì gé] = 高僧の楼閣（高い建物）。〇平心 [píng xīn] = 心を落ち着かせて、冷静になって。左訓「ウチトケテ」（打ち解けて）。〇閣「各」士「自」大 = 「閣士大」は、「徳のある高僧が住んでいる建物」という意味の三字「大士閣 [dà shì gé]」を逆さまに読んだもの。本来は無意味だが、「閣士大 [gē shì dà]」という語は「各自大 [gè zì dà]」と音が近いいため、「おのおのそれぞれに立派である」という意味にも聞こえる。「各自」は、二字で「おのおの」「それぞれ」の意。「自」は助字（文法的な意味を担うもの）であり、本義としての意味（「みずから」

「自分」など）はない。なお、ここに附された割注「各」「自」は、中国刊本に見える原注である。左訓「オホキナ」（皆、大きな）。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

簡単に言ってしまうと、この話は、都会の学生も田舎の学生も、どちらも間拔けだということである。

間が抜けているポイントとは、以下の六つである。まず第一に、三種の匾額の文字（大中丞）「大理卿」「大士閣」を、すべて逆さまに読んでいることに気づいていない点。第二に、逆さまに読み間違えた「丞中大 [chéng zhōng dà]」という三字を、同音語の「城中大 [chéng zhōng dà]」（都会の方が優れている）」という意味だと勘違いしている点。第三に、「大理卿 [dà lǐ qīng]」の「卿」という字を形が似ている「郷」という字に読み間違えている点。第四に、このように「卿」という字を誤読した上に、さらに逆さまに読み間違えた「郷理大 [xiāng lǐ dà]」という三字を、同音語の「郷裏大 [xiāng lǐ dà]」（田舎の方が優れている）」という意味だと勘違いしている点。第五に、「大士閣 [dà shì gé]」という三字を「閣士大」と逆さまに読み間違えた上に、さらに発音の似たことば「各自大 [gè zì dà]」（二人ともそれぞれに優れている）」という意味だと勘違いしている点。第六に、そのような「各自大（二人ともそれぞれに優れている）」という匾額の言葉一つで、二人とも打ち解けて、心平气和に「自慢比べ」に終止符が打たれている、という点。いずれにしても、都会の学生も田舎の学生も、どちらも間が抜けていて可笑しい、というところが「ツボ」である。ただし、匾額の文字を逆さに読んで、このように「都会がいい」とか「田舎がいい」とか「どちらもいい」などと、実にうまく読み間違えられるなどということは、余りにもできすぎた話であり、実際に二人の「監生」の間に交わされた話であったとは思えない。恐らくは、インテリ文士による言葉遊びの創作笑話であろう。

書き下し文

監生 自ら大なり
 城裏の監生 郷下の監生と 各 大を争んと要す。城裏者之を恥て曰く。我
 們見多く識広し。你 郷裏の人は 孤陋寡聞なり。兩人 争辨して已まず、因て大
 街に往て同く行く。各 長ずる所を見る。一大第の門首に到る。匾上に大中
 丞の三字あり。城裏の監生 倒しまに看て 指して謂て曰く。這豈に 是 丞 中大
 ならざらんや。乃ち一の徴驗なり。又一宅に到る。匾額は 是 大理 卿なり。郷
 下の監生 郷字を以て 認じて郷字と作す。忙に亦 倒念して之を指して曰く。
 這は 是 郷裏大なり。兩人 各 高下を見ず。又一寺 門首に來り。上に大士閣と
 題す。彼此 平心和議して曰く。原來 閣「各」士「自」大なり。

現代語訳

都會の學生と田舎の學生が、お互いにそれぞれどちらが偉いか張り合っていた。都
 會の學生は、田舎の學生をバカにして、こう言った。

「都會者の」わしらは 経験が豊富で博識である。(それに対して)お前ら田舎もんは、
 視野が狭くて無知である。」

両者は、しきりに言い争ってやまなかった。そこで、二人一緒に大通りへ行き、自
 分の方が相手よりも優れているところを、それぞれ見せ合うことにした。

ある大邸宅の門前にやって来ると、匾額(横長の板)に「大中丞 [dà zhōng
 chéng]」(訳者注、官職名。地方の民政、軍政を司る長官を言う。)という三文字
 が記されていた。都會の學生は、(教養も學識も常識もない、どうしようもない人物
 なので)それを(左から右へ)逆さまに読み、指差しながら、こう言った。

「これは、『丞 中大 [chéng zhōng dà]』、つまり『城 中大 [chéng zhōng dà]』
 ということじゃから、(城壁に囲まれた)都市の方が立派である、ということではな
 いのかい。ほうれ、この匾額の文字こそが、都會の方が偉いという証拠じゃわい。」

そしてまた、(今度は)とある邸にやって来た。匾額には「大理卿 [dà lǐ qīng]」(訳
 者注：官職名。裁判官に相当する。)と書かれていた。田舎の學生は、(これまた同じく、
 教養も學識も常識もない、どうしようもない人物なので)「卿」という字を(形が似
 ているので、「と」という意味の)「郷」という字と勘違いして、すくさまこれを(さっ

き都會の學生がやったのと全く)同じように逆さまに読み、指差しながら、こう言った。
 「これは『郷理大 [xiāng lǐ dà]』、つまり『郷裏大 [xiāng lǐ dà]』ということじゃから、
 田舎の方が立派である、ということではないのかい。(ほうれ、この匾額の文字こそが、
 田舎の方が偉いという証拠じゃわい。)」

両者は(やはり譲らず)、それぞれ互いに決着がつかなかった。そしてまた、ある
 お寺の門前にやって来た。そのお寺(の入り口)には、「大士閣 [dà shì gé]」(訳者
 注：高僧の住む楼閣という意味)という文字が刻まれていた。すると二人は(それ
 を見て)、互いに心を静め、仲直りして、こう言った。

「なるほどそういうことじゃったか、『閣士大 [gé shì dà]』、つまり『各自大 [gè zì dà]』
 ということじゃから、(わしもお前も、どちらがどうということではなく、
 互いに)それぞれ立派である、ということじゃわい。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・古艶部(一九丁裏～二〇丁表)。「新鐫笑林広記」卷之一・
 古艶部(第四〇話、九丁表)。○自大 [zì dà] = 自ら偉大である、立派であると思う。
 尊大ぶる、驕る、天狗になる。「夜郎自大 [yè láng zì dà]」と同じ。和刻本の訓読
 「自ら大なり」とは、やや異なる。○城裏 [chéng lǐ] = 城壁で囲まれている内側の
 地域、城郭都市の内部。ここでは、「都會」の意。日本の「城」とは異なる。○郷下
 [xiāng xià] = 田舎、農村、地方。現代中国語と同じ。左訓「キナカ」(田舎)。○争大
 [zhēng dà] = 偉大さを競う、どちらが立派かを争う。ただし、中国白話文献の用例未詳。
 左訓「ジマンクラベ」(自慢比べ)。○見多識廣 [jiàn duō shí guǎng] = 経験が豊富で、
 幅広い知識を有している。「廣」は「広」の正字。清代の白話小説『鏡花縁』第四四
 回に「多九公本是久慣江湖。見多識廣。每逢談到海外風景。竟是滔滔不絶。」(多九公
 は、もともと世界中のことをよく知っていたし、博学多才であったので、海外事情の
 ことに話が及ぶと、ついには延々と弁舌を振るい続けるのが常であった。(拙訳))と
 ある。左訓「ハクガクタサイ」(博学多才)。○孤陋寡聞 [gū lòu guǎ wén] = 學識が
 浅く、見聞が狭い。通常は謙遜の辞として用いられる。「見多識廣」の反義語。『三国
 演義』第一〇回に「某孤陋寡聞。不足當公之薦。」(私は浅学菲才の身で、いまして、
 貴殿の御推挙に与るほどの者ではございません。(拙訳))とある。○争辨 [zhēng biàn]

補注

この話は、『絶纓三笑』巻二時笑・外語五四（第一四四話「監生娘娘」（一説））に類話がある。なお、和刻本『笑府』に類話はない。『絶纓三笑』収録話の原文は、以下の通りである。拙訳を添える。

『絶纓三笑』第一四四話（巻二・時笑・外語五四、東京大学文学部蔵本、三〇丁表裏）

監生娘娘

監生至廟。見有監生神祠。其神女身也。謂其妻

曰。元來你可納做得監生。妻曰。我不識字。如何做得。曰。我何嘗識字。

也。認得一監字。未是不識一丁。○一説看見

監生娘娘歸謂妻曰。原來監生恁大。連你的渾身都塑下了。○至至生曰。眞箇夫榮妻貴。

地獄の監視役人の御婦人である女神さま（国子監の学生の奥さま）

国子監の学生が、（土地の守り神を祭った）城隍廟へやって来た。その祠に

祀られている神さまを見ると、女の身体をしていたので、自分の妻にこう言った。

「なんだ、お前だってお金を納めたら、（この祠に祀られている「監生」の奥さまのように）国子監の学生になることができるんじゃないか。」

すると、妻は言った。

「わたしは文字が読めません。どうして学生になることなんてできましようか。」

「いや、わしだって、文字なんぞ、読めませんがな。」

（編者のコメント）（この学生は「監」という一文字は読めたのだから、「一字も読めない（不識一丁）」というほどではなかったのである。○一説に、次のような話も伝わっている。冥界の地方官の奥さまを女神として祀っているのを目にして、（国子監の学生は）家に帰って妻に言った。「なるほど、『監生（国子監の学生）』というのは、こんなにも偉大な存在なのだなあ。（妻である）お前の全身像までもが作られておるのじやから。」訳者注、「監生娘娘」とは、「冥界の地方官である城隍神の夫人」の意だが、

この学生は「国子監の学生の奥さま」と誤解しているのである。○至至生（編者）は言う。まさしくこれぞ、本当の「夫榮妻貴」[fū róng qī guī]（夫が出世すると、妻の身分も上がる）」というものである。

余説

土地の守り神として「監生娘娘」[jiānshēng niángniáng]が祀られているのを見て、ものを知らない「監生」[jiānshēng]（国子監の学生）は、「監生」とはなんて偉大なものなのだろう、その妻までも神さまとして祀っているのだから、と勘違いしたという話である。

「監生」[jiānshēng]という語は、確かに「国子監の学生」という意味でもあるが、声調の異なる「監生」[jiānshēng]は「冥界の監視役人」（＝「土地の守護神」という意味であり、そしてまた「娘娘」[niángniáng]という語は、この場合「奥さま」ではなく「女神さま」という意味である。この程度のことから分らないのは、一般教養としての言葉の知識があまりにも欠如しているということである。「学生の妻」如きを「女神さま」として崇め奉る筋合いはない。ましてや、この「監生」、そんなことも知らないところから判断して、間違ひなく「納粟入監」[nà sù rù jiàn]の制度を利用して、金で学生の身分を買っただけの「監生」であろう。

⑥③ 監生自大（国子監の学生は自分が偉いと思っている）

原文

監生自大也

城裏ノ監生與郷下ノ監生各要爭競。大城裏者耻之曰。我門見多知識廣シ。你郷裏ノ人孤陋寡聞。而人爭辨不已。因往大街同行。各見所長。到一大第門首。匾上大中丞三字。城裏ノ監生倒シ看指謂曰。這豈不是丞中一大。乃一徵驗。又到大宅。匾額是大理卿。郷下ノ監生以卿字。認作郷字。忙亦倒念指之曰。這是郷裏大了。而人各不見高二下。又來一寺門首。上題大士閣。彼此平心和議。曰。原來閣「各」士「自」大。

り。帰て妻に謂て曰く。原来、我々監生は、恁般に尊貴なり。你的像まで。早已に都城隍廟裏に塑在し了す。

現代語訳

(最高学府である) 国子監の学生〔監生 [jiānshēng]〕が、(土地の守り神をお祀りした)「城隍廟」にやって来た。すると、(冥界の地方官である)「城隍神」をかたどった神像の) 横に「監生案 [jiānshēng'àn]」という冥界の監視役人の机があり、その机の上に「監生娘 娘像 [jiānshēng niángniang xiàng]」という女神の像が置かれていた。この学生は、家に帰ると、妻に言った。

「なるほどねえ、わしら学生というものは、こんなにも高貴で尊い存在だったのじゃなあ。もうすでに(学生の妻である)お前の像まで作って、城隍廟にお祀りしておたぞ。」

【和刻本割注】一般に、女性を神としてお祀りしたものを、「娘 娘 [niángniang]」

または「媽媽 [māma]」という。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(一九丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部(第三九話、八丁裏く九丁表)。○娘 娘 [niángniang] ≡ 女神さま、特に、子授けの神さま。『水滸伝』第四二回に「只見兩箇青衣童子。逕到厨邊。舉口道。小童奉娘法旨。請星主說話。宋江那里敢做聲答應。」(青衣の童子がふたり、まっすぐに厨子のところへやってきて、声をかけた。「わたくしどもは女神さまのおいにつけて、星主さまをお迎えにまいりました」宋江は声を出して答えるところではない。(駒田信二訳「中国古典文学大系」第二九巻『水滸伝(中)』(平凡社、一九六八年五月、五〇頁)とある。また、「娘 娘」には「奥さま」「御婦人」という意味もある(『儒林外史』第五三回「他家那些娘娘們房裏。」(あそこのご婦人がたのお部屋は)(稲田孝訳「中国古典文学大系」第四三巻『儒林外史』(平凡社、一九六八年十月、四六五頁))。○「凡稱「祭女為「神曰「娘娘或媽媽」」この割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。○媽媽 [māma] ≡ お母さん。中国語「媽媽」は、遠山荷塘

の割注に示されたような意味(「女神さま」)では通常用いられないが、「航海の女神」(道教における守護神の一人)を媽祖 [māzǔ] と呼ぶ場合がある。例えば、現代の日本にも「媽祖」を祭った「横濱媽祖廟」がある。○城隍廟 [chéng huáng miào] ≡ 地の神様、守り神。中国では、古く周の時代から「冥界(あの世)の地方官」を「城隍廟」にお祀りしていたが、元代・文宗の天慶二年(一二三九)、さらに「城隍夫人」として女の神様もお祀りするようになったと言う。「城隍廟」は中国各地に建てられているが、現在では「上海城隍廟」が特に有名。左訓「ウブスナノヤシロ(産土の社)」。○監「平声」生案 [jiānshēng'àn] ≡ 冥界(あの世)を監視する役人が使用する机のこと。「監生」という語は、「国子監の学生」という意味のときは去声で [jiānshēng] と読まれ、冥界(あの世)の監視役人という意味のときは平声で [jiānshēng] と読まれる。和刻本は「監」に平声の声点(文字の左下隅に白丸の印)を附す。つまり、割注「平声」は、「監生」という語が、「国子監の学生」という意味ではなく、「冥界(あの世)の監視役人」という意味であることを示しているのである。なお、この割注は、中国原本に存する原注である。○塑「監生娘 娘像」≡「監生娘 娘」は、本来は「冥界(あの世)の守り神である城隍さまの御夫人(女神さま)」の意だが、ここに登場する「監生(国子監の学生)」は「国子監の学生の奥さま」という意味で理解している。「塑[sù]」は「泥や粘土で人物などの形を作る」という意味の動詞。左訓「ツクリタテ、アルコヤスノ カミ」(作りたてである子安の神)。「ツクリタテ、アル(作りたてである)」の誤刻であろう。「子安の神」は「安産の神」という意味。○原来 [yuánlái] ≡ なるほど、そうだったのか(副詞)。それまで知らなかったことがはつきりしたときに、驚きとともに口をついて出てくる言葉。現代中国語と同じ。日本語の「元来」とは異なる。第一一話「無一物」、第二七話「澆其妻妾」に前出。○恁般 [nènbān] ≡ このように。現代中国語「這樣 [zhèyàng]」「那樣 [nàyàng]」に相当する。左訓「カヤウニ」。○連 [lián] ≡ 「～やえも」「～まいも」という意味の前置詞(介詞)。しばしば「也 [yě]」「都 [dōu]」「還 [hái]」と呼応する。第二三話「退束修」では、この意味の「連」をも古典的な訓読法に従って「～をつらねて」と訓んでいたが、ここでは「～まで(も)」と訓ませている。なお、第六四話「自不識」に見える「連」自不識(自分のことすら分らない)も、これと同じ用法だが、和刻本は明確な訓点を附さない。

来ル書生 猶低シト云僧 是ヲ聞テ 此三書 其一ツ
ニ熟シテモ 飽々ト世ニ稱セラル 皆低シト云ハ イカナ
ル博學ナルヤト尋ルニ 書生 曰 吾眠ラント要ス 枕ニセン
ガ爲ナリト 答フ

『笑顔はじめ』第二三話（東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本、二九丁表～三〇丁裏）
居候

或る儒者のところへ居候に
居る儒者あり 毎日外へ
出て 昼時分にかへり 己れが
部屋へ行 小僧を呼んで
書物を貸せといふ 小僧
文選を持きたる 是ハ 低イと
いふ故又 漢書をやれバ
まだ 低イといふ 今度ハ
史記を あてかへバ 是でも
ひくいといふゆへ 小僧あきれ
凡 史記 漢書と申てハ 大
ていの 学者も 口をきゝます
それを 低イと 仰られます
ハよほどの 御学力でござ
ります そして 何が よふい
ざります 居候 イヤ／＼ お
れハ 昼寐の 枕にしますから
節用でも よふござる

『笑林広記』所収話では、『文選』も『漢書』も『史記』もすべて「低い」という書生の言葉を不審に思い、どういうことだと訊ねるのは僧侶であるが、江戸小咄として書き直された『笑顔はじめ』においては、質問者が小僧になっている点が異なる。

『笑顔はじめ』所収話は、江戸小咄『十千万両』（天明六（一七八六）年序、二九丁表～三〇丁裏）に再録されている。『十千万両』は、『笑顔はじめ』天明二（一七八二）年序）の一六丁以降の板木を流用した嗣足改題本である（京都大学文学部頼原文庫蔵）。『笑顔はじめ』所収話「居候」は、『漸本大系』第十二卷（武藤禎夫編、東京堂出版、一九七九年五月、二六頁）および『絵入江戸小咄本』（尾崎久弥編、東京、金竜堂書店、一九二九年五月、三三〇頁）に、翻刻が備わる。

余説

科挙の受験勉強のために寺に下宿している学生が、『文選』『漢書』『史記』などという歴史書のレベルを「低い（低）」と言っているのかと思ったら、それらの書物はどれも「枕にするには高さが足りない（低）」と言っているだけであった、という笑い話。第五七話「納粟詩」、第五八話「坐鑑」、第五九話「咬飛刃」、第六〇話「入場」に引き続き、この第六一話「書低」も、科挙試験を控えた「監生（国子監の学生）」をからかった話である。

なお、受験勉強に集中するため、お寺の一室を間借りするという設定は、第五八話「坐鑑」に見えるのと同じである。

⑥2 監生娘（「国子監の学生の奥さま」ではなく「冥界の監視役人の御夫人である女神さま」）

原文

監生娘「凡稱ニ祭レ女為レ神曰ニ娘娘或媽媽ニ」

監生至ニ城隍ノ廟ニ。傍ラニ有ニ監「平聲」生ノ案。塑ニ監生娘ノ像ヲ。婦ニ謂妻ニ曰ク。

原来我レ們 監生ニ恁一般ニ尊貴ニ也。連ニ你的ノ像ニ。早已ニ都 塑ニ在シ城隍ノ廟裏ニ了。

書き下し文

監生娘「凡そ 女を祭り神と為すを称して 娘娘 或ひは 媽媽と曰ふ」

監生 城隍廟に至る。傍らに 監「平声」生の案に。監生娘の像を塑せる有

た。その少年が『文選』を持って行くと、(この書生は) それを見て「低い」と言った。『漢書』を持って行くと、やはりそれを見て「低い」と言った。そこで『史記』を持って行ったが、それを見てまた「低い」と言った。お寺の和尚さんは、大いに驚いて、次のように訊ねた。

「これら三つの書物はのう、そのうちの一つにでも習熟すれば、博学と称することのできるものじゃ。それなのに、それらをすべて『低い』と言うのは、いったいどうしたわけなのじゃ。」

すると、書生はこう言った。

「私は(夜遊びをして疲れたので、いま猛烈に)寝たいのです。だから、枕にするための本が欲しかっただけなのですよ。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(一九丁表裏)、『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部(第三八話、八丁裏)。○呼「[h]」(人と呼んで用事を)言いつける、命ずる、に…させる。左訓「シム」(使む)。ただし、漢文訓読において「呼」を「シム」と読むのは一般的でないため、書き下し文は「呼びて(せ)しむ」としておいた。○文選[Wénxuǎn]＝南北朝時代、梁の昭明太子によって編纂された詩文集。全六〇巻。中大通二年(五三〇)頃成立。中国では早く宋代から、『文選』に習熟すれば科挙の試験勉強も半分はできたも同然である、と言われた(陸游『老学庵筆記』巻八に「方其盛時。士子至爲之語曰。文選爛秀才半。」とある)。○漢書[Han shu]＝中国の正史。前漢の歴史を紀伝体で記した書物。後漢の学者、班固の撰。全一二〇巻。建初七年(八二)頃成立。○史記[Shi ji]＝中国最初の紀伝体の歴史書。前漢の学者、司馬遷の著。全一二〇巻。征和二年(紀元前九一)頃成立。○大詔[daichō]＝大いに驚く、たまげる。現代中国語「驚訝[jīngyà]」と同じ。左訓「ドウテンシテ」(動顛して)。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はないが、清代笑話集『笑倒』に、ほぼ同文の笑話が収まる。『笑倒』は、『増訂一夕話新集』(康熙五十七年(一六五八)序)第三卷所収の笑話集。『笑倒』所収話については、中国古典

文学大系59『歴代笑話選』(松枝茂夫訳、平凡社、一九七〇年五月、三三八頁「書低」、ちくま文庫『中国笑話集』(駒田信二編訳、筑摩書房、一九九九年七月、二二六頁)に翻訳がある。また、出典は明記されていないが、『中国笑話集』(村山吉廣訳編、社会思想社、現代教養文庫767、一九七二年十二月、一四三頁「書低」)も、『笑倒』による翻訳であろう。

『笑倒』の原文は、次の通りである。引用は、『歴代笑話集』(王利器輯録、上海、上海古典文学出版社、一九五六年十二月、四四九頁)による。ただし、句読点は日本式に、漢字は正字に改めた。

『笑倒』(『歴代笑話集』、上海古典文学出版社、四四九頁)

書低

一秀才賃僧房讀書、惟事遊玩而已。忽至午歸房、呼童取書來、童持文選、視之曰低。持漢書、視之曰低。又持史記、視之曰低。僧大詔曰、此三書熟其一、足稱飽學、俱云低何也。試問之、乃取書作枕耳。

なお、『笑林広記』所収「書低」は、すでに江戸時代に伊丹椿園(生年未詳、一七八一年)による日本語訳『笑林広記鈔』(安永七年(一七七八)刊)が出版されており、『笑林広記鈔』「書低」による江戸小咄が『笑顔はじめ』(天明二年(一七八二)頃刊)に収録されている。それぞれの原文は、次の通り。引用は、『笑林広記鈔』は京都大学附属図書館蔵本(『嘶本大系』第二十卷(武藤禎夫編、東京堂出版、一九七九年十二月、三〇一頁に影印がある)、『笑顔はじめ』は東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本(画像データ)による。

『笑林広記鈔』第一話(京都大学附属図書館蔵本、一丁表裏)

書低

一書生。僧房ヲ賃テ學問ス毎日外ニ出テ遊玩シ午後ニ到テ房ニ歸ル童子ヲ呼テ書ヲトリ来レト云童子文選ヲ取来ル書生見テ低シト云童子再ビ漢書ヲ取来ル。又低シト云ニ史記ヲ取

めに会場に入る」意。○方「fāng」＝まさに、ちょうど、やっと、今しがた、さっき。現代中国語「方纔」[fāngcái]「纔」[cái]と同じ。○「故人」[yì gù rén]＝一人の昔なじみ。「故人」は「昔から知っている友人」「旧友」。左訓「トモダチ」（友達）。○揖「yī」＝両手を胸の前に合わせて御辞儀をする、拱手の礼を行うこと。○并「bìng」＝二つの動作が同時に行われることを示す副詞（「なおかつ」）。現代中国語「而且」[érqiě]「并且」[bìngqiě]と同じ。○猪屎「zhū shǐ」＝豚のウンチ。左訓「ブタノフン」（豚の糞）。○大腸「場」＝「大腸」[dà cháng]は「大腸」の意（日本語と同じ）。「腸」は「腸」の異体字（俗字）。「大場」[dà chǎng]は「試験場」の意。『儒林外史』第四二回に「你說這大場。進得進不得。」（あなたは試験場にはいますか？）（稲田孝訳「中国古典文学大系」第四三巻『儒林外史』（平凡社、一九六八年十月、三七五頁）。「場」は「場」の異体字（俗字）。この割注は、中国刊本に見える原注である。右傍訓「オホハラ」（大肚＝大腸の意）。左訓「ホンシラベノコト」（本調べのこと＝本試験の意）。

補注

この話は、『笑府』巻一（第九話「出場」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、二〇～二二頁）を参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。

『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同がある。

『笑府』第九話（巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、四丁裏）

出場

監生方出場。遇一故人。故人揖之。并揖路旁猪糞。生問此臭物。揖之何為。答曰。他臭便臭。也是腸。『場』裡出、來的。

余説

金の力で学生の身分を手に入れた輩は「豚のウンチ」と同じである、なぜならば、どちらも「大腸」[dà cháng]（大腸）＝「大場」[dà chǎng]（試験場）から出たものだから、

という話である。中国語によるダジャレであるが、本話はその表現が直接的に下がっている。

『笑林広記』所収話の本文には「監生応付入場」と書かれており、「お金を支払って科挙試験場に入った学生」をからかった話であることが明記されているが、『笑府』所収の類話には「応付入場」という語が抜けているため、金で学生の身分を買ったかどうかとは無関係に、「国子監の学生（監生）」などという連中は、総じて「豚のウンチ」である、とも読める話になっている。意識的であったかどうかは不明だが、『笑府』所収話の方が、さりげなく辛辣である。

⑥書低（書物が低い）

原文

書低

一生賃僧房讀書。毎一日遊玩。午後歸房。呼童取書來。童持文選。視之曰低。持漢書。視之曰低。又持史記。視之曰低。僧大詫曰。此三書熟。其一、足稱飽學。俱云低。何ソ也。生曰。我要睡。取書作枕頭耳。

書き下し文

書低

一生賃僧房を賃して書を読む。毎日遊玩し。午後房に歸り。童を呼びて書を取り來らしむ。童文選を持す。之を視て曰く低し。漢書を持す。之を視て曰く低し。又史記を持す。之を視て曰く低し。僧大詫して曰く。三書其の一を熟すれば。飽學と稱するに足る。俱に低しと云ふは何ぞや。生曰く。我睡んと要す。書を取り枕頭と作すのみ。

現代語訳

ある書生、お寺の一室を借りて勉強することにした。ところが毎日遊んでばかり。（ある日）昼過ぎに部屋に戻り、召使いの少年に「本を持ってこい」と言いつけ

である。もしも口で金を貸してくれと言ったら、ウンとは言ってくれないに決まっているからである。

余說

本話は、清代における最高学府であつた「こくし国子監」に、金に物を言わせて不正入學した金持ちのどら息子たちを、極めて辛辣しんらつに風刺したもの。全身が薄汚い金かね（銀貨）にまみれた、このような「裏口入學」の學生たちの、「元宝」「yüánbǎo」（馬蹄銀）（ばていぎん）のようなその耳を噛みちぎれば、噛みちぎられたその小さな肉片は、小粒銀（こつぶぎん）（「飛辺」「fēibiān」）として使えるだろう、なぜならこういう奴らは全身が銀貨でできているから、というわけである。

実際に学生の耳を噛みちぎったなどという事件があったわけではあるまいが、この話は、今日天才画家と称される画家ゴッホが、ゴーギャンとの確執の末、ついには自分の耳をナイフで削ぎ落としてしまった、という話と同じくらい衝撃的なものであり、軽妙な言葉遊びやダジャレのように、軽く笑いとばすことはできない。とりわけ、身に覚えのある「監生」にとっては、実に「耳の痛い」話であつたに違いない。

⑥⑦ 入場 にゆうじよう
(試験会場に入る)

原文

入
レ
場
ニ

監一生應付^{シテ}入^リ場^ニ出^ツ。一故^一人相^レ遇^フ拵^レ之^ニ。并^ニ拵^ス路^ノ傍^ニ猪^ノ屎^ニ。生間^ヲ
 ツケト^ケ、ケニデ^シラ^レニデ^ル。トモ^ヲチ
 此^ノ臭^ハ物^ノ、拵^ス之^ヲ何^ノ為^レソ。荅^テ曰^ク。他^ハ臭^{ナル}ハ便^チ臭^レトモ。
 モク^ルイ^ノ。クサイ^ハクサ^ケレ^ドモ
 也^ハ從^リ大^ニ腸^ヲ裏^ニ出^テ
 來^ルの。ホン^ニシ^ノニ^ト

書き下し文

ちやう
場に入る

監生 かんせい 応付して場に入り 方にいづ。 一故人 ひとに 相遇ふて 之にいづ。 并に路傍の猪屎に 押す。 生問ふ此の臭物、之をいふ。 何為れぞ。 答て曰く。 他は臭なるは便ち臭なれども。 也大腸「場」裏より出で来るもの。

現代語訳

国子監こくしかんの学生が、お金を支払つて（学生の身分を手に入れ）、科擧の試験場に入った。
 ちようど（試験場から）出てきたときに、昔なじみの友だちとばったり出くわし、そ
 の友だちは（両手を胸の前に組んで）拱手きやうしゆの礼で挨拶を行い、また同時に、道端みちばたに
 落ちていた豚のウンチにも、同じように拱手きやうしゆの礼を行った。国子監こくしかんの学生は、訊ね
 て言う。

「こんな臭いものに拱手きょうしゅの礼おごなを行うとは、いったいどういうことなんだい。」

「豚のウンチは、確かに臭いことは臭いのだが、それでもな、（豚のウンチというものも、お前とまったく同じように）これまた『大腸[*dàcháng*]（試験場という意味の「大腸[*dàcháng*』と発音が近い）」の中から出てきたものなのだな。」

注

○『訳解笑林広記』 卷之上・古艶部（一九丁表）。『新鐫笑林広記』 卷之一・古艶部（第三七話、八丁裏）。○監生 [jiānshēng] = 最高学府「国子監」の学生。清代の中国では、金銭で「監生」の身分を買うこともできた（前出）。○應付 [yīngfù] = お金を払う。「應」は「応」の本字。『醒世恒言』 卷三三「十五貫戲言成巧禍」に「當下喫了午飯、丈人取出十五貫錢來。付與劉官人道。姐夫且將這些錢去。收拾起店面。開張有日。我便再應付你十貫。」（昼食を済ませると、すぐに妻の父は十五貫のお金を取り出し、役人の劉さんに渡しながら言った。「義兄さん、このお金を持って行つて、お店を整理してください。そして、いつかお店を始めるときには、私がさらに十貫を用立ててあげましょう。」（拙訳）とあり、岡白駒が訓点を附した和刻本『小説精言』（寛保三年（一七四三）刊、卷一・三丁表）の該当箇所には「ツツケル」（貢ぐ、仕送る、お金を与えて人を助ける意）という左訓が附されている。『訳解笑林広記』の左訓は「ツケト、ケニテ」（付け届けにて）。「付け届け」とは「祝儀」「謝礼」「御礼として差し上げるお金」の意。○入場 [rù chǎng] = 科挙の試験会場に入る。左訓「シラベニデル」（調べに出る）。「調べ」は「科挙試験（合格が不合格かを調べるテスト）」の意（前出）。第五二話「嘲武孝詩」では「参主考」（試験監督をする）という語に対して「シラベニデル」（調べに出る）という左訓を附していたが、ここでは「試験を受けるた

トオモフ」(端の方をちと食ひかきて使おうと思ふ)。○如く一般 [rī-yībān] へのようなものである。現代中国語の「像く一样 [xiàng-yíyàng]」と同じ。なお、文末に附された割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。

補注

この話は、原本『絶纓三笑』巻二時笑・調語七(第二五二話「大銀」)に類話がある。『絶纓三笑』所収話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、文章に異同があり、かなり長文の「評語」が附されている。拙訳を添える。

『絶纓三笑』第二五二話(巻二、時笑・調語七、東京大学文学部蔵本、四丁表～五丁表)
大銀

一人街上遇一監生。遂咬他一口。監生曰。你如何咬我。其人曰。見了三五兩大銀子。如何不咬。塊下來用。

祖宗朝設國學在郡邑學之上。以爲取郡邑之賢而教之。遂可馴致大用。此法未嘗不善。近重科目。而濫觴及于納貲。躋躋蹢躅滿目。皆元寶而已。遂使有志借途之士亦溷雜其中。不分賢否。若數奇不偶。積學者與白丁同一結果。反有不及者焉。可爲斯文喪氣。安得有擔當國事者。出一議論。復其祖制。而嚴輪粟一途。庶乎士氣一振耳。不然。詞林中煩兩司成到衙門。只爲巨室富商。作開蒙先生。教習跪拜而已。豈不冤哉。○至至生曰 該咬該咬。若開口與借。決是不肯。

大きな銀貨

ある男、街中で国子監こくし監の学生とばったり出くわし、突然ガブリと噛みついた。学生は言った。

「お前は、どうして私に噛みつくのですか。」
男は言った。

「何百両もの大金を見たら、どうして噛まずにおられましようか。ガブリと噛みちぎって、小銭として使ってみたと思っただけです。」

(編者のコメント) 中国の歴代王朝は「郡学」(郡の学校)や「邑学」(村の学校)と呼ばれる地方の学校よりもレベルの高い「国学」(国の学校)を設置し、郡や村から優秀な人材を中央に集め、教育しようとした。そして、そのような制度が、次第に大々的に行われるようになったのである。この制度自体は、別段悪いものではなかった。ところが、近年においては、受験科目を重視するあまり、賄賂と不正入学の濫觴となり、制度自体が、ずるずると見渡す限り、手垢にまみれた金、金、金の世界になってしまったというわけである。そしてついには、大志を抱いた優秀な人材と、金の力で権力を手に入れようとするだけの凡才とが、「国学」(国家の最高学府)に紛れ込み、玉石混淆の埒塙と化してしまったのである。もしも運悪く、学識豊かな人材が、無学で教養のない凡才と同じように、試験に合格できないという状況に陥ったとしたら、学識豊かな人たちは、すっかりやる気を失い、国家の大事を背負って立とうとするような人物が、もはや現れなくなってしまうのではなからうか。このようなことが問題になるようになってしまったからには、この制度を、もう一度歴代王朝が代々規範としてきた本来の制度の在り方に立ち返り、賄賂や不正入学の道を厳しく取り締まらなければならない。そうして初めて、学問に志す者たちの士気を、どうにか奮い立たせることができるのである。さもなくば、翰林院かんりんいん(国家の学問所)や布政司ふせいし(国家の行政府)や按察司あんさつし(国家の司法府)から小さな役所に至るまで、世の中の学識豊かな人材は、ただただ素封家や大富豪のためだけに幼児教育をするしかない教師となり、権力者に媚び諂い、地べたに跪いてペコペコ土下座しながら生きることになってしまうであらう。そんな世の中は、あまりにも馬鹿げているのではなからうか。○至至生曰く。噛んでしかるべき

つまり、この話は、荷物運びの男が「坐鑑」[zuò jiàn]（『資治通鑑』の上に腰を下ろす）という意味で使った言葉が、「坐監」[zuò jiān]（『国子監』の学生として勉強する）という意味にも聞こえてしまったため、大事な書物の上に座ってしまったことに対する軽い言い訳が、図らずも社会風刺的な発言になってしまった、というもの。要するに、「坐鑑」「坐監」という同音語によるダジャレが、この話の「笑いのツボ」というわけである。

⑤9 咬飛辺（小粒銀をガブリと噛む）

原文

咬飛邊

貧子途ニ遇監生。忽然抱住兜耳一口。生驚問其故。荅曰。我窮苦極矣。見了大錠銀子。如何不下咬些飛邊用用。[納銀做監生。是如滿身銀做的。一般]

書き下し文

飛邊を咬む
貧子 途に監生に遇ふ。忽然と抱住して兜耳に一口す。生驚て其の故を問ふ。荅て曰く。我窮苦極れり。大錠の銀子を見了して。如何ぞ些の飛邊を咬んで用用せざらん。

「銀を納れて監生と做るは是満身銀做すの如く一般」

現代語訳

貧乏人が、(本来は、科挙の受験勉強をするエリートたちの通う最高学府であったが、不正な金で入学する者が次から次へと増えてきた) 国子監の学生と、道でばったり出くわした。すると突然、(その貧乏人は、この学生を) ぎゅっと抱きしめ、耳にガブリと噛みついた。学生はびっくりして、「どうしてこんなことをするのか」と訊ねた。(そこで、貧乏人は) こう答えた。

「わたしは爪に火をとますような貧民、だから大きな銀貨が歩いているのを目の

当たりにして、小粒銀なりとも、ガブリと少し噛み切って(小遣い銭として) 使っていたと思ったのです。」

【和刻本割注】 お金を納めることによって国子監の学生(監生) となった者は、まさしくその全身が銀貨でできているようなものである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(一九丁表)。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部(第三六話、八丁表裏)。○飛邊 [fēi biān] = 小粒銀。江戸時代には「豆板銀」「小玉銀」とも呼ばれた。豆のように細かく砕いた銀貨のこと。李漁『比目魚(利集)』に「每人一塊飛邊。有一錢多重。拿去買烟吃。」(各人、一錢(約五グラム) 余りの小粒銀を持って行き、煙草を買って吸いました。(拙訳) とある。「邊」は「辺」の異体字(俗字)。○監生 [jiānshēng] = 最高学府「国子監」の学生を指す。清代には、金銭でその身分を買うこともできた(第五七話「納粟詩」、第五八話「坐鑑」参照)。○兜耳 一口 [dōu ěr yī kǒu] = 耳を一口ガブリと噛んだ。「兜」[dōu] は、「く」に向かって「く」に向けて」という意味の前置詞(介詞)と思われるが(『紅樓夢』第二四回「秋紋兜臉啐了一口道(秋紋は顔に向けて唾を吐きかけて言った。(拙訳)、『笑林広記』本文には、本来あるべき「噛む」意を表す動詞(咬[yǎo])が抜けている。ひとまず「兜耳(咬了) 一口」(耳に向かって一口(噛んだ) と理解しておく。なお、「兜」の前置詞としての用法に即した訓みが存在しないため、書き下し文は、しばらく和刻本の訓点に従う。左訓「ミ、カラミ ヒトクチクヒツク」(耳からみ、一口食ひ付く)。○大錠 [dà dìng] = 清代に通用した「元宝[yuánbǎo]」と呼ばれる馬蹄型の銀貨。その大きさ(重さ) により、「大錠」「中錠」「小錠」の三つに分類された。「大錠」は、重さ五十両(約二・五kg) の銀貨。「元宝」は、その形が人間の耳に似ている。また、中国料理の餃子は、この銀貨の形をかたどったものと言われる。左訓「オホカネ(大金)。○如何ッ 不下咬ニ些フ飛邊用用」(銀貨(大錠銀子) のような) 耳を少し噛み切って、それを小粒銀(飛邊) として、ちよつと使ってみようと思ひます、どうしてそうしないでいられましようか。「用用[yòngyòng]」は、「用」という動詞を重ねた形(動詞の重ね型)、「ちよつと使ってみる」意を表す。現代中国語と同じ。左訓「ハシノホウヲチトクヒカキテツカラ、

入れて、(お寺の勉強部屋まで) 一足先に運び込ませた。ところが、荷物運びの人夫は、途中で疲れ切つてしまい、荷物の上に腰を下ろした。すると、ちょうどそのとき、夫の監生がやって来て、そばにいた人から、荷物運びの男が『資治通鑑』(という歴史書)の上に座っていると聞き、「それは怪しからん」と言つて、この人夫を叱りつけた。すると、人夫は次のように謝罪した。

「わたくしは、文字が読めませんので(それが、天子さまがこの国をお治めになった歴史を書き記した、恐れ多い書物だとは存じませず、ふとした軽い気持ちから)、ちょっとした間だけ、書物の上に腰を下ろしてしまつたのでございます(「わたくしは、文字が読めませんので、ちょっとした間だけ、国子監の学生として勉強させて頂くことになったのです)。たいへん申し訳ございませんでした。」

【和刻本割注】これは、文字も読めなくせに監生となつた者をからかつた話である。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部(一八丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部(第三四話、八丁表)。○監生[jiānsēng]＝最高学府「国子監」の学生(第五七話「納粟詩」参照)。和刻本のタイトルに附された割注は遠山荷塘によるものであり、中国原本にはない。○脚夫[jiǎofu]＝荷物運びの人夫。左訓「ニンブ」(人夫)。○籬担[luòdān]＝竹や籬で編んだ籠。持ち運び用の手荷物。左訓「ニナヒカゴ」(担ひ籠)。○通鑑[tōngjiàn]＝『資治通鑑』。元豊七年(一〇八四)成。全二九四卷。宋代の学者、司馬光が編纂した編年体の歴史書。○因為[yīnwéi]＝～により、～のため。原因・理由を表す接続詞。英語の「because」に相当する。現代中国語と同じ。左訓「ツイテ」。

○一嘗[yīcháng]＝ちょっと、少し、一時的に。「嘗」は「時」の異体字。中国原本(乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵)は「時」に作る。左訓「チョット」。

○坐了鑑[zuòjiàn]＝坐鑑[zuòjiàn]は「資治通鑑」という書物の上に腰を下ろす」意。全く同音の「坐監[zuòjiàn]」は「監生が学校(国子監)で勉強をする」意。『警世通言』巻三二「杜十娘怒沈百宝箱」に「姓李名甲。(中略)自幼讀書在庠。未得登科。援例至於北雍。因在京坐監、與同鄉柳遇春監生。同遊教坊司院

内。」(李甲という男は(中略)幼い頃から郷里の学校で勉強をしていたが、まだ科擧の試験に合格できなかったので、納粟入監の制度を利用して、北京の国子監(北雍)に入学した。そして、都で学校に通いながら勉強していたとき、同郷の柳遇春という監生と一緒に遊廊へ遊びに行き(拙訳)とある)。つまり、「坐了鑑[監]」は「(ちょっと)『資治通鑑』の上に座つてしまつた」という意味と、「(監生としてちょっと)学校に上がつてしまつた」という、二重の意味をもつことになる。なお、「監」を第一声(平声)で読めば、「坐監[zuòjiàn]」は「監獄に入る」「牢屋に入る」(＝「坐牢[zuòlǎo]」)という意味にもなる。○弗怪弗怪[fúguài fúguài]＝どうぞ怒らないでください、どうかそんなに責めないでください。文語「弗」は現代中国語「不」に相当する否定詞。否定命令文(～しないでください)を作る。「怪」は「責める」「とがめる」意の動詞。動詞句を繰り返すことにより、「ちょっと～する」意を表す(動詞の重ね型)。いずれも現代中国語と同じ語法。左訓「ゴメンゴメン」(御免御免)。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

本話は、第五七話「納粟詩」に引き続き、「納粟入監」の制度を利用して「国子監」に入学した学生をからかつたもの。荷物運びの人夫が最後に語った台詞「わたくしは文字が読めませんので、ちょっとした間だけ『資治通鑑』の上に腰を下ろしてしまつたのです(「因為不識字、一時坐了鑑」)」という言葉は、中国語で発音した場合、「鑑[jiàn]」と「監[jiàn]」がまつた多くの同音語であるため、「わたくしは、文字が読めませんので、ちょっとした間だけ国子監の学生として勉強することになったのです(「因為不識字、一時坐了監」)」という意味にも聞こえてしまう。

本来は、古今の書籍に通じた教養人だけが「監生」になれたはずなのに、清代の中国社会においては、金の力で「監生」の身分を手に入れるという不屈きな「裏口入学者」たちが後を絶たなかったため、文字も読めない無教養な人間が「ちょっとした間だけ監生になる(一時坐了監)」などという可笑しい事態が現実起こっていた、ということである。

高曾祖。考也。煥乎其有。文章也。

一生怕考納監。々中又要考試。此生直題其卷曰。因怕如此。所以如此。若要如此。何苦如此。又父子俱為庠生。聞文宗至。大恐相與謀。曰。父偽死而子丁憂。可兩無恙矣。因偽死。而令陰陽生安神位。陰陽生誦曰。先考某處士。父聞而躍起曰。不成不成。是大家商量做的。事。如何要先考我。然則不上。革車者。怕高曾祖也。下士曰。三百兩。原是秀才納銀之數。彼不由釐序者。又不止革車矣。彼原不高曾祖。何必煥乎其有耶。

『山中一夕話（開卷一笑）』（下集・卷之六、京都大学文学部蔵本、一四丁裏）

納粟監生

革車「言三百兩也」買得截然高「言大帽也」。周子牕前「言草也」

滿腹包。忽朝若遇高曾祖「言考也」煥乎其有「言文章也」

没分毫。

『古今譚概』文戲部第二十七（万曆四八年（一六二〇）成、『馮夢龍全集』第四〇

卷（二一〇八頁）

○歇後詩

相傳嘲監生詩云。革車買得截然高「大帽」。周子牕前「草」滿腹包。有朝一日高曾祖「考」。煥乎其有「文章」没分毫。

余説

この風刺詩は、実力もないのに金の力で科擧の一次試験を突破し、「監生」[jiansheng]の身分を手に入れた裏口入学の学生たちには、文章を作成する能力がまったくないことを嘲笑ったもの。この詩は、明末の文人・馮夢龍が編集した、文言による笑話集『古今譚概』にも、「歇後詩」として収録される。

可能な限り「注」のなかで「歇後詩（なぞなぞ）」の謎を解くことに努めたが、このように極めてレトリカルな技法に満ちた（ふざけた）中国詩を、江戸時代の日本人はどこまで正確に理解し、味わうことができたのか、少なからず疑問に思えなくもない。当代きつての中国通であった遠山荷塘にとつても、このような作品を注釈的に読み込むことは並大抵のことではなかったに違いない。和刻本に附された割注は、このような「歇後詩」を存分に味わうためには甚だ不十分であるように思われる。

⑤⑧ 坐鑑（『資治通鑑』の上に座る。）

原文

坐鑑ニ「調以不識字為二監生」

一監生ノ妻、屢、勸其夫ヲ讀書。因假寓于寺中、素、無書籍。乃喚脚夫、以二籬担ヲ挑、書先ニ往。脚夫中途、疲、甚。身坐担上。適生至。聞傍人ノ語、所坐通鑑。因怒責脚夫。夫謝罪曰。小人因不識字。一皆坐了鑑「監」。弗怪弗怪。

書き下し文

鑑に坐す「字を識らざるを以て監生と為るを調す」

一監生の妻、屢、其の夫に勸て書を讀し。因て寺中に仮寓す、素より書籍無し。乃ち脚夫を喚て、籬担を以て書を挑じて先に往かしむ。脚夫中途にして疲ること甚し。身担上に坐す。適に生至る。傍人の通鑑に坐る所を語るを聞き。因て怒て脚夫を責む。夫罪を謝して曰く。小人字を識らざるに因為して。一時鑑「監」に坐了す。弗怪。弗怪。

現代語訳

ある監生（最高学府「国子監」の学生）の奥さんは、いつも自分の夫に「もっと勉強をしろ」と言っていた。そこで、（奥さんは、夫がもっと勉強に集中できるように）お寺に下宿させた。お寺には（科擧の試験勉強に役立つような、中国の歴史や朱子学に関する）書物が揃っていませんでしたので、荷物運びの人夫を雇い、籠に書籍を

原本に附された割注である。例によって『絶纓三笑』のみ編者による評語が大幅に加えられているが、諷刺詩については、いずれのテキストも、割注による解答を含め、すべて同一である。

『絶纓三笑』所収の評語には、拙訳を添えておく。『絶纓三笑』と『四書笑』は、一部文字に異同が見られるが、ほぼ同文と言ってよい。

『絶纓三笑』第六五〇話（巻四、儒笑五六、東京大学文学部蔵本、二三丁表裏）

煥乎其有文章

嘲監生歇後詩曰。革車買得截然高。周子窓前滿腹包。有朝一日高曾祖。煥乎其有没分毫。革車三百兩也。截然高大帽。〔貌〕也。周子窓前草也。高曾祖。考也。煥乎其有文章也。

一生怕考納監。監中又要考試。此生直題其卷曰。因怕如此。所以如此。若要如此。何苦如此。又父子俱爲庠生。聞文宗至。大恐。相與謀曰。父僞死而子丁憂。可兩無恙矣。因僞死。而令陰陽生安神位。陰陽生誦曰。先考某處士。父聞而躍起曰。不成不成。是大家商量做的。事。如何要先考我。然則不止革車者。怕高祖也。下士曰。三百兩。原是秀才納銀之數。彼不由釐序者。又不止革車矣。彼原不高曾祖。何必煥乎其有耶。

（編者のコメント）ある科挙受験生、試験が怖くて堪らなかった。「納粟入監」の制度を利用して、金で学生の身分を手に入れたものの、学校では、

またしても試験を受けなければならなかった。そこでこの学生は、試験の解答用紙に、次のような言葉を書き綴った。

「こんなにそれが怖いから、だからこのようになったのです。もしもこんなことをしなければならぬのなら、こんなことはしなくてもいい

じゃないか。」

また、次のような話も伝わっている。父と息子は、二人とも学生であったが、文章博士が学校にやって来ると聞いて、ビビってしまった。そこで、二人は相談し、父親は死んだふりをすることにした。息子は、父の喪に服していたが、その実、二人とも元気であった。とはいえ、父は死んだことになっているので、陰陽師を呼んで、宗廟に祭る位牌を用意した。陰陽師は、位牌の文字を読み上げて言った。

「亡き父、誰それ様（訳者注、原文「先考某處士」は、「受験恐怖症の父」の耳には、「まず誰それ様から、試験を始める。」という意味に聞こえてしまふのである。）」

父は、それを聞いて、飛び起きながら言った。

「だめだ、だめだ。これは、みんなで話し合ってたことです。どうして、先に私から試験を始めなければならぬのじゃあ。」

つまり、「革車 [gēchē]」（三百両）という金もさることながら、（裏口入学した学生たちが）本当に恐れていたのは「高曾祖 [gāozēngzǔ]」＝「考 [kǎo]」（試験）の方だったのである。

下士曰く。「三百両」とは、もともと科挙受験生が裏口入学のために支払った銀の価格を表していたのだが、学校で勉強していない不正入学者たちは、実際には、「革車」（＝三百両（約一六五〇万円））どころの騒ぎではなかった。それどころか、こいつらは、そもそも「高曾祖 [gāozēngzǔ]」＝「考 [kǎo]」（試験）を受けたこともなかったし、ましてや、「煥乎其有 [huàn hū qí yǒu]」＝「文章」なんて、書いたことすらなかったのである。

『李卓吾先生批點四書笑』第四二話（国立公文書館（内閣文庫）蔵本）

煥乎其有文章（注、標題は巻頭「四書笑目錄」に拠る）

嘲監生歇後詩曰。革車買得截然高。周子窓前

滿腹包。有朝一日高曾祖。煥乎其有没分毫。革

車。三百兩也。截然高。大帽。〔貌〕也。周子窓前。草也。

高く聳え立っているさま」という意味である。(拙訳)(元禄五年(一六九二)刊『四書集注』)とある。つまり、「截然高」という謎解き言葉の解答は「大貌[dànmào]」=「大帽[dànmào]」(大きな帽子)というわけである。この『大学章句』の朱子注については、『訳解笑林広記』第一〇話「蛙帽」(虫に食われた帽子)参照。○大帽[dànmào]＝大きな帽子、立派な学生帽。科挙の一次試験に合格した者(国子監)で勉強することを許された学生)は、「方巾[fāngjīn]」という四角い帽子をかぶっていた。和刻本『訳解笑林広記』第一話「無一物」参照。○周子臆前[Zhōuzi chuang qian]＝周茂叔(著名な大学者)の部屋の前にある庭は(草が茫々と生い茂っていたが、ものにこだわらない、さっぱりとした性格の持ち主であった周茂叔は、そんなことは気にかけなかった)ということ。周子とは、宋学の祖とされる周敦頤(一〇一七～一〇七三、字茂叔、号濂溪)のこと。蓮を愛したことで知られる(『古文真宝後集』『愛蓮説』)。「臆」は「憲」と同字。常用漢字「窓」は「憲」の略字。これも「歇後語(けんご)」「尻切れとんぼの謎解き言葉」となっており、その心は「草」である。『朱子語類』巻九六に「周子憲前草不除去」、王陽明『伝習録』に「周茂叔憲前草不除去」などある、後半の一字「草」を省略したもの。○満腹[mǎnfù]＝お腹のなかに満ちあふれている。中国では文才はお腹に宿る(「肚裏有文章」と考えられており(大木康『中国古典小説選12 笑林笑賛・笑府他』(明治書院、二〇〇八年十一月、二四〇頁参照)、通常は「満腹文章」「満腹経綸」など、その人の内面が、学問的知識や深い教養に満ちあふれているさまを表す。例えば、『警世通言』巻七「陳可常端陽仙化」に「郡王本要打殺可常。因他満腹文章。不忍下手。監在獄中。」(郡王は、本来なら可常を叩き殺したいのであったが、彼に十分な詩才があったので手を下すに忍びず、獄舎に監禁を命じられた。(全譚中國文學大系『警世通言(一)』(辛島曉譚註、東洋文化協會、一九五九年十月、一九九頁))とある。しかし、ここでは、通常の言い方とは逆に用いられており、この不正入学者である「監生(科挙受験生)」のお腹(内面的な世界)には、「草(粗雑な文章、未完成の原稿)」しか入っていない、と言うのである。○有朝[yǒu zhāo]＝いつの日か、いつかのような日がきたときには。現代中国語「有朝一日」「有一天」「有天」などと同じ。左訓「イツカ」。○高曾祖[gāo zēng zǔ]＝中国語では、祖父の祖父を「高祖[gāozǔ]」と言ひ、祖父の父を「曾祖[zēngzǔ]」、祖父を同じく「祖父[zǔfù]」、亡くなった父のことを「考[kǎo]」と言ひ。そして、これらの代々続く

御先祖様たちのことを、すべて合わせて「高曾祖考[gāo zēng zǔ kǎo]」と言ひ。例えば、『明史』巻五一・志第二七・礼五に「唐高祖尊高曾祖考。立四廟於長安。」(唐の高祖(初代皇帝・李淵)は、歴代の御先祖様を尊び、長安に四つの靈廟を建立した。(拙訳))、『曾國藩家書』に「早晨要早起。莫墜高曾祖考以來相傳之家風。」(朝は早起きすべし。先祖代々、脈々と受け継がれてきた家風を損ねてはならない。(拙訳))とある。つまり、「高曾祖」とは、「高曾祖考」の「考」が抜けたものであるから、この「なぞなぞ」の答えは「考」となる。ただし、この場合の「考」は、「亡くなった父」という本来の意味ではなく、さらに一ひねりして「科挙試験」「テスト」という別の意味の「考」と理解しなければならぬ。中国原本の割注には「言考也」とあり、遠山荷塘はこれに対して「シラベ(試験)と左訓を施している。○煥乎其有[huàn hū qí yǒu]」『論語』泰伯篇に見える「煥乎其有文章」(聖人君子が作り上げた)礼楽制度は、みごとに光り輝いている」という六字句の後半の二字「文章」を抜いたもの。したがって、謎解き言葉「煥乎其有」の答えは「文章」となる。ただし、これも『論語』に言う「礼楽制度」という意味の「文章」ではなく、科挙に課された試験問題としての「文章(作文)」のこと。科挙では、「四書五経」の言葉を踏まえながら「八股文」という精密かつ技巧的な文章を作成する能力が問われた。そしてもちろん、賄賂を贈って裏口入学をした学生たちに、そのような文章を作成する能力が「微塵も備わっていない(没分毫)」ことは、言うまでもない。

補注

この風刺詩は、中国笑話集『絶纓三笑』巻四・儒笑五六(第六五〇話「煥乎其有文章」、李卓吾先生批点『四書笑』(第四二話「煥乎其有文章」、李卓吾編次『山中一夕話』(一名「開卷一笑」)下集・巻六「納粟監生」、および『笑府』の編者であった明・馮夢龍の『古今譚概』(一名『古今笑』)巻二七・文戲部に収録されている。原文は、それぞれ以下の通りである。

『絶纓三笑』の引用は東京大学文学部蔵本、『四書笑』の引用は国立公文書館(内閣文庫)蔵本、『山中一夕話(開卷一笑)』の引用は京都大学文学部蔵本、『古今譚概』の引用は『馮夢龍全集』第四〇巻所収の影印(魏同賢主編、上海古籍出版社、一九九三年、一一〇七～一一〇九頁)に拠る。なお、括弧「」で示したのは、中国

【和刻本割注】「納粟入監」の制度を利用して学生の身分を手に入れた者をからかったもの。

【訳者注】この「七言絶句」風の「歇後詩」[xiéhòushī]（「歇後語」[xiéhòuyǔ]）は、第一、二、四句が押韻している。韻字は「高 [gāo]」「包 [bāo]」「毫 [háo]」。また、第一句と第二句「革車買得截然高、周子窓前滿腹包。」は緩い対句になっており、それなりに「七言絶句」の体裁を整えている。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一八丁裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第三二話、七丁裏）。○納粟 [nà sù] 古代中国では、役人の地位を得るために、賄略として粟や米などの農作物を納めたため、不正な金による賄賂行為のことを「納粟」と言った。とくに明清時代には、「納粟入監」の制度が設けられ、金銭を支払うことによって、最高学府である「国子監」[guó zǐ jiān] の学生（監生）となることができた。『警世通言』第三二巻「杜十娘怒沈百宝箱」冒頭部分に、「納粟入監」の制度を導入するに至った経緯が、次のように記述されている。「さて、話は万曆二十年、日本国の関白が乱を起こして、朝鮮を侵犯してきたことである。朝鮮の国王が上表して危急を訴えたので、天朝では兵を發して海路よりこれが救援に赴くことになったが、このとき、戸部（財政部）の当局は、『戦争勃發に際し、糧秣の不足を補うため、暫く納粟入監（穀物または銀を上納して国子監の監生の資格をとる）の制度を設けられたし』と上奏して裁可を得た。そもそもこの納粟入監という制度には、いろいろの便宜があつて、勉強するにも、科擧の試験を受けるにも、交際をするにも、すべて好都合な上に、将来はまたなにがしかの官途も約束されているわけである。そのために、役人や金持の子弟は、秀才（府県学の学生）にはなろうとしないで、みんなこの制度を利用して太学生（国学の学生、監生）になった。この条例が出てからというもの、兩京（北京と南京）の太学生はどちらも千人以上にあててしまった。」（千田九一・駒田信二訳「中国古典文学大系」第三七巻『今古奇観（上）』）（平凡社、一九七〇年九月、六〇頁）左訓「カネニテクワンヲカウコト」（金にて官を買う

こと）。○援例 [yuán lì] = 「納粟入監」（お金を納めて国子監に入る意）の制度（条例）を利用して。『警世通言』第三二巻（同前）に「以此宦家公子。富室子弟。到不願做秀才。都去援例做太學生。」（そのために、役人や金持の子弟は、秀才（府県学の学生）にはなろうとしないで、みんなこの制度を利用して太学生（国学の学生、監生）になった。（前掲書）とある。○監生 [jiānshēng] = 最高学府「国子監」の学生。三年に一度行われる科擧の一次試験「鄉試 [xiāngshì]」を受験する資格が与えられた。なお、タイトルに附された割注「調援例納粟の監生」[調援例納粟の監生]の制度を利用し、お金で「監生（学生）」の身分を買った者をからかった詩）は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。ただし、この詩が「監生」をからかったものであることは、馮夢龍編『古今譚概』「歇後詩」に「相傳嘲監生詩云」（「監生」を嘲る詩として伝わっているものに、次のようなものがある。（拙訳）と記されていることから確認することができる。『古今譚概』については、補注参照。○贈納粟詩 [贈納粟詩] = 和刻本は訓読を誤っているため、私に改めた。正しくは「贈納粟詩」[贈納粟詩]。○革車 [gé chē] = 革で包まれた戦車のこと。ただし、ここでは「歇後語（尻切れとんぼの言葉遊び）」（第五四話「老父」参照）として、「孟子」尽心章句下に見える「革車三百両」という五字句の後半「三百両」を導き出す役割を果たしている。つまり、「三百両」もの賄賂を贈って「監生（学生）」の「大きな帽子（大帽）」を手に入れた、という意味。磯田道史「武士の家計簿」（新潮社、二〇〇三年四月、五五～五六頁）に従い、金一両を約五万五千円として計算すると、賄賂の額「三百両」は、現代の日本円で約一千六百五十万円となる。『孟子』尽心章句下の原文および書き下し文は、「武王ノ之伐レトキ、殷ヲ也。革車三百兩。虎賁三千人」（武王の殷を伐、革車三百兩、虎賁三千人）（本文は元禄五年（一六九二）和刻『四書集注』、書き下し文は『經典余師集成』二（大空社、二〇〇九年六月、五三一頁）による）。なお、この話の本文中にある割注は、すべて中国原本にあるものであり、それぞれ「歇後語」[xiéhòuyǔ]（「尻切れとんぼの謎解き言葉」）の解答を示している。例えば、「革車」という「歇後語」の解答は「言三百両」（三百両という意味である）など。○截然高々 [jié rán gāo gāo] キリリと高く聳えている。「截然 [jié rán]」は「区別がはっきりしている」こと。『大学章句』伝十章「詩云。節彼南山。維石巖巖。」に見える朱子の注に「節。截然高大貌。」（『詩経』に見える「節」という語は「截然として

という生き方こそが、この世で最も幸福な人生であろう。

朝鮮刊本『鍾離胡蘆』第一三話（『朝鮮所刊中國珍本小説叢刊8』一〇―一一頁）
（影印、五丁裏―六丁表）

公子

一人問封君与公子孰樂 荅曰 做封君

齒已衰矣 唯公子最好 其人疾趨而去

追問其故 曰。家父書生也 欲令急、入

學

余説

息子を科挙試験に合格させるよりも、父親を合格させる方が、自分にとっては得策であるという話。しかし、頭の柔らかい子どもを教育するのならばいざ知らず、すでに大の大人になっている父親を教育して科挙試験に合格させるなど、限りなく不可能に近い夢物語であろう。そのような、現実的には極めて馬鹿げた話であるということに可笑しさがある。

なお、『初刻拍案驚奇』卷十三に「到了六七歳。又要送他上學。」（六、七歳になったら、今度はその子を学校に連れて行かなければならない。）とあるように、「送他上學」（その子を学校へ連れて行く）という表現は、六、七歳の子どもの場合にこそ相応しい。いい年をした大の大人を学校へ行かせる（送家父去上學）という言い方だが、実はかなり滑稽であることに注目しておいてもよからう。

⑤7 納粟詩（金の力で学生の身分を手に入れた人をからかった詩）

原文

納粟詩「調援例ヲ納ルノ粟的監生」

贈「納粟」詩二曰。

革車「言三百兩」買得截然高「言大帽也」。周子

「言文章也」没二分毫。

書き下し文

粟を納むる詩「例を援き粟を納むるの監生を調ず」

粟を納むる詩を贈て曰く。革車「三百兩を言ふ」買ひ得て截然と高し「大帽を言ふ也」。周子窓前「草を言ふ也」満腹に包す。朝有り若し高曾祖に遇はば「考を言ふ也」。煥乎として其れ有りは「文章を言ふ也」分毫も没し。

現代語訳

（誰かが）「金の力で学生の身分を手に入れた人の詩」を贈呈した。その詩に言う。「戦車の数は」と聞かれたら、それは『孟子』（尽心章句下）にある通り、「三百輛」でございましょう、その「三百輛」ならぬ「三百両」（現在の日本円では約一千六百五十万円）という高額の、賄賂を贈って手に入れた、学生さまの身分とは、「截然として高く（ほにやらら）」（『大学章句』伝十章の朱子注）、つまり「高く大きなそのようす」「大貌『damao』」ならぬ「大帽『damao』」の、「大きな大きな学生帽」というわけです（革車買得截然高）。

（偉大な学者）周茂叔さまは、目の前に茫々と生い茂る雑草など、まったく気に留めることもなく、手入れはしなかったと申しますが、（この、「納粟入監」の制度を利用して、金の力で学生の身分を手に入れた連中は）その「茫々と生い茂る雑草」のような、「草稿」レベルの下手な文章ばかりを、お腹いっぱい詰めてこんでいる、つまり、（この連中には学生ならば当然備えていべき）文章を作る能力など、これっぽっちもないのです（周子窓前満腹包）。

さて、「御先祖様（高曾祖考『gāo zēng zǔ kǎo』）」とこう言葉の中で、「高曾祖」には抜けている、その「亡き父上さま考（考）」ならぬ「科挙試験（考）」というものを、もしも受けることにでもなったなら（ほんとにどうなることでしょう）（有朝若遇高曾祖）。そのときは、「煥乎として其れ文章有り（煥乎其有文章）」（『論語』泰伯篇の語、原文は「聖人君子のこの業績、この礼楽制度は、キラキラと眩く光り輝いている」意）という言葉の中で、「煥乎として其れ有り（煥乎其有）」には抜けている、その「文章」というものが、（裏口入学の学生たちには）微塵もかけられないのですから（この連中は、きつとテストで落第点を取るでしょう）（煥乎其有没分毫）。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一八丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第三一話、七丁裏）。○上學 [shàng xué] ≡ 学校へ行く。現代中国語と同じ。『初刻拍案驚奇』巻十三に「到了六七歳。又要送他上學。」（六、七歳になると、またその子を学校まで送って行かなければならない。（拙訳）とある。○樂 [lè] ≡ 楽しい、愉快である、幸せである。現代中国語「快樂 [kuài lè]」と同じ。『絶纓三笑』評に見える「樂」という語も、『笑林広記』と同様に「幸福である」「幸せである」と理解してよからう（補注参照）。○好 [hào] ≡（動詞の前に置いて）～するのに便利である、～しやすい（ように）。和刻本のように、「まさに」（せんと）す」と訓読する例は珍しい。ここでは、「お父さんが学校へ行くのに便利のように、本を買いに行く」意。

補注

この話は、『笑府』巻一（第二〇話「公子」、『絶纓三笑』巻一時笑・澹語四六（第四六話「公子」）に類話があり、さらに、『絶纓三笑』所収話が朝鮮刊本『鍾離葫蘆』（第一三話「公子」）に収録されている。和刻本『笑府』等に類話はない。

なお、『笑府』については、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月三一～三二頁）に日本語訳が備わり、『鍾離葫蘆』については、崔溶澈氏『鍾離葫蘆』（鮮文大學中韓翻譯文學研究所、二〇〇二年、三九頁）に韓国語訳が備わる。

朝鮮刊本『鍾離葫蘆』（全七八話）は、一六二二年、朝鮮王朝において木板印刷された漢文笑話集であり、韓国・高麗大学の崔溶澈氏によって、二〇〇二年、新たに発見されたものである。崔溶澈氏の研究により、『鍾離葫蘆』所収の笑話は、中国笑話集『絶纓三笑』（全七二六話）から採録し、一部文章を書き換えたものであることが、すでに報告されている（崔溶澈『明代笑話「絶纓三笑」与朝鮮刊本「鍾離葫蘆」』（『風起雲揚 首届南京大学域外漢籍研究國際學術研討會論文集』所収、張伯偉編、北京、中華書局、二〇〇九年一〇月、六三六～六四三頁））。

以下に掲げる『笑府』本文の引用は筑波大学中央図書館蔵本により、『絶纓三笑』の引用は東京大学文学部蔵本、『鍾離葫蘆』は『朝鮮所刊中国珍本小说叢刊8』（孫遜・

朴在淵・潘建国 編、上海古籍出版社、二〇一四年一〇月）所載の影印による。

なお、原刊本に存する句読は、日本式の句点「。」で表記し、読みやすさを考慮して私に附した句読は、読点「、」で表している。『笑府』の本文は、第五五話「公子封君」補注に示したものと同一である。

『笑林広記』本文と比べれば、文末に編者の評語が附されている以外、ほぼ同文である。『絶纓三笑』附載の評語には、拙訳を添えておく。

『笑府』第二〇話（巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、八丁裏～九丁表）

公子

一人問封君與公子孰樂。答曰。做封君齒已衰矣。惟公子最樂。其人急趨而去。追問其故。曰欲送家父上學。

有公子兼封君者。父對之欣羨不已。訝問其故。曰。你的爺既勝似我的爺。你的兒又勝似我的兒。

『絶纓三笑』第四六話（巻一、時笑、澹語四六、東京大学文学部蔵本、二六丁表裏）

公子

一人問封君與公子孰樂。答曰。做封君齒已衰矣。惟公子最樂。其人急趨而去。追問其故。曰。欲送家父上學。

封君前段未樂。猶夫公子後段。亦有坎坷。不若先爲公子。而卽爲封君。乃是世上第一樂人。

（編者のコメント）（息子が立身出世した親に与えられる）「封君」という身分の人も、前半は（息子が立身出世するまでの前半生は）、まだ幸せではないし、また（親が立身出世した）「公子」という身分の人も、後半は（親が亡くなってしまったあとの後半生は）前途多難なものである。やはり、まず「公子」となり、それからすぐに「封君」となる（まず権力者の御曹司として生まれ、そしてすぐに自分の息子が権力者になる）

お、和刻本『笑府』に類話はない。

『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』と、ほぼ同文である。

『笑府』第二〇話（巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、八丁裏九丁表）

公子

一人間封君與公子執樂。答曰。做封君齒已衰矣。惟

公子最樂。其人急趨而去。追問其故。曰欲送家父上學。

有公子兼封君者。父對之欣羨不已。訝問其故。曰。
你的爺既勝似我的爺。你的兒又勝似我的兒。

余説

「公子」でもあり「封君」でもあるこの人物、実は蓋を開ければ、父親も息子も立派なのに、当人だけが立派でない、ということに笑ったもの。最後の一句の巧みな言い回しに、この話のツボがある。

「公子」とは、その父親が立身出世した息子（御曹司）のことであり、「封君」とは、自分の息子が立身出世したために天子から恩典を受けることになった名譽ある父親のことである。そして、この二つの身分を兼ね備えた人物とは、子どもの頃は「お坊ちゃん（公子）」と呼ばれ、大人になってからは、こんどは息子のおかげで、周りの人からあれやこれやと敬われる存在である。

しかしこれを、息子の父親の立場に立って考えてみると、どうなるか。父親にしてみれば、自分の親は身分が低かったために、自分は「公子」としてちやばやされることもなかったし、自分自身は努力して科擧に合格して一定の地位を築き上げたとはいうものの、息子は取るに足りない「どら息子」にすぎないため、「封君」として人から敬われることはない。そして、このような自らの不遇の一因こそ、とりもなおさず「公子」でもあり「封君」でもある、「羨ましくてたまらない」（欣羨不已）この「どら息子」にある。父親はそのことを、「この世で最も幸福な人物（世上第一樂人）」（『絶纓三笑』第四六話「公子」評）と言ってよい「どら息子」に向かって、それとなく批判しているのである。

本話は、このような特殊な状況を、父親の目線からシニカルに捉え、巧みな対句で

表現しているところに（「你的爺既勝過我的爺。你的兒又勝過我的兒。」）、皮肉っぽい、知的な可笑しさがこもっている。

なお、『絶纓三笑』第四六話「公子」評については、次の第五六話「送父上学」の補注を参照。

⑤⑥送父上学（父親を学校へ行かせる）
原文

送レフテ父ヲ上レス學ニ
ガクモンシヨ

一人間公子與封君執樂。答曰。做封君齒已衰矣。惟、公子ハ年一少ニシテ最樂シ。其人急ニ趨ニテ去ル。追問ニ其故ヲ。答曰。買ニテ了書ヲ。好ニ送ニテ家一父一忤ニテ上レテ學ニ。

書き下し文

父を送つて学に上す
一人公子と封君と孰れか樂しと問ふ。答て曰く。封君と做るは樂しと雖も齒已に衰ふ。惟公子は年少にして最も樂し。其の人急に趨つて去る。追て其の故を問ふ。答て曰く。書を買ふて。好に家父を送り去て学に上んとす。

現代語訳

ある人が、（父親が立派な）公子の身分と、（息子が立派な）封君の身分と、どちらが幸せであるかと訊ねたところ、次のように答えた。

「（息子が立派な）封君の身分は幸せだと言っても、（息子が立派になってから与えられる身分なので、それでは自分が）すでに年老いてしまっているから、やはり（父親が立派な）公子の身分の方が、年齢も若いし、最も幸せと言えるでしょう。」

すると、（最初に質問をした）その人は、急いで走り去ってしまった。追いかけてその理由を訊ねると、こう答えた。

「お父さんを学校へ行かせるために、本を買っておこうと思ひまして。」

ここでは、県知事に対して「わが父よ」などと呼びかけたことになる。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

この話は、「老先 [lǎoxiān]」という「お役所言葉」を知らない一般庶民の愚を笑ったもの。

ただし、話のオチは、「老先 [lǎoxiān]」という語を知らずに、「歇後語 [xiēhòuyǔ]（尻切れとんぼの言葉遊び）」で自分をからかったと勘違いした庶民の親父が、腹立ち紛れの仕返しとして、県知事（お代官さま）に向かって、「老父母 [lǎofùmǔ]（旦那さま）」と言うべきところ、同じく「尻切れとんぼ」の言い方で「老父 [lǎofù]（おとう）」と呼びかけた、というところにある。これを現代風に言えば、文化勲章を受賞した一般庶民が、皇居のお茶会に参列し、その席上で天皇陛下に向かって、「おとう」と呼びかけた、というようなものである。このような言葉遣いには、かなり不遜な、きわどい滑稽味が感じられるのではないだろうか。

⑤⑤ 公子封君（公子であり、なおかつ封君でもある人）

原文

公子封君

有公子兼封君者。父對之。乃欣羨不已。訝問其故。曰。你的爺既勝過我的爺。你的兒又勝過我的兒。

書き下し文

公子封君

公子封君を兼ねる者有り。父之に對して。乃ち欣羨して已まず。訝て其の故を問ふ。曰く。你的爺は既に我的爺に勝過す。你的兒は又我的兒に勝過す。

現代語訳

（親が立身出世した）公子の身分でありながら、なおかつ（息子が立身出世した）封君の身分でもある人物がいた。この人物の父親は、自分の息子のことを、頻りに羨ましがってばかりいた。（息子はそれを）不思議に思い、（父親に）理由を訊ねたところ、（父親は）こう言った。

「お前の父親は、わしの父親よりも立派だし、しかもなおかつ、お前の息子は、わしの息子よりも立派だからじゃ。」

注

【訳者注】父親も息子も、どちらもお前の方が立派である、ということだが、言い換えれば、父親も息子も立派なのに、お前だけが立派でない、ということになる。

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一八丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第三〇話、七丁表裏）。○公子 [gōngzǐ] ≡ 若君、貴公子。立派な家柄に生まれた子、権力者を父にもつ息子のこと。古代中国においては諸侯の子息を指す語であった。ここでは、科挙試験に合格した人（進士、秀才）を父にもつ息子のこと。左訓「シンシノコ」（進士の子）。○封君 [fēngjūn] ≡ 息子が出世したために天子から封典を授かった父祖（前出）。ここでは、科挙試験に合格した息子（進士、秀才）をもつ父親のこと。○欣羨 [xīnxiàn] ≡ うらやむ。左訓「ウラヤマシカル」（羨ましがる）。○爺 [yé] ≡ こゝでは、父親のこと。現代中国語においても、この用法は方言語彙の中に残っている。○既 [jì] ≡ 「又 [yòu]」と呼びして、くでもあるし、なおかつ：でもある。すでにであるのみならず、また：でもある。現代中国語と同じ。○勝過 [shèngguò] ≡ くに勝る、くより優れている。「過於 [guòyú]」と同じ。『笑府』所収の類話は「勝似 [shèngsì]」に作る。いずれも同意。左訓「マサル」（勝る）。

補注

この話は、『笑府』巻一（第二〇話「公子（注）」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、三二頁）を参照。な

書き下し文

老父

一市井封を受け。初めて県官に見ゆ。其の菌尊きを以て。これを称して老先と曰ふ。其の人怒を含んで帰る。子其の故を問て。曰く。官我を欺くこと太甚し。彼我を老先生と称して。纔に是なるべし。乃ち歇後の語を作し。甚麽老先と叫ぶ。明かに輕薄するに係る。我回称も也曾て便宜を失了せず。子何を以て称呼すと詢ふ。答て曰く。我本応に他を老父母と称すべきに。今亦後韻を縮住して。只他を声の老父と叫ぶ。

現代語訳

(息子が出世したために) 天子から封君を授けられることになった一般庶民の親父さん、初めて県知事とお会いすることになった。親父の方が県知事よりも年上だったので、県知事は親父さんを「老先 [lǎoxiān]」「おじい」と呼んだ。するとこの親父、ムカムカしながら帰ってきた。息子がその理由を訊ねると、こう言った。

「あの役人野郎、わしをバカにするにもほどがある。奴はわしのことを『老先生 [lǎoxiānshēng] (お爺さん)』と呼んでしかるべきところを、なんとも猪口才な尻切れとんぼの言葉を弄して『老先 [lǎoxiān] (おじい)』などと抜かしやがった。これは明らかに、わしを愚弄しているというもんじゃ。ところがどっこい、わしだって、バカにされてそのまま黙っているような間抜けじゃねえ、こちとらも奴に対して、うまいこと言い返してやったわい。」

息子が、県知事のことをどのように呼んで言い返したのかと訊ねると、親父はこう答えた。

「わしは本来あいつのことを『老父母 [lǎofùmǔ] (旦那さま)』とも呼ぶべきところだったのじゃろうが、(あいつと同じように、尻切れとんぼの言葉を弄し) 最後の一字をカットして、『老父 [lǎofù] (おとう)』と呼んでやったのじゃ。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部 (一七丁裏～一八丁表)。『新鵠笑林広記』巻之一・古艶部 (第二九話、七丁表)。○尊 [zūn] = 年齢が上である。『醒世恒言』第三八巻「李

道人獨歩雲門」に「一族之中。惟李清年齒最尊。推爲族長。」(一族の中で、李清が最年長であったため、族長に推挙された。(拙訳)とある。○老先 [lǎoxiān] = お年寄りに対する敬称。「お爺さん」「御老人」という意味。『李卓吾先生批評西遊記』第十五回に「老先休怪休怪。我這馬。實不瞞你說。不是偷的。」(お爺さん、どうか怒らないでください。私のこの馬は、嘘ではなく本当に、盗んだものではないのです。(拙訳)とある(引用は、内閣文庫蔵本(巻三、一二丁表)による)。「老先 [lǎoxiān]」は「老先生 [lǎoxiānshēng]」を省略した形だが、相手を軽んじる意を含まない。○含怒而歸 = ムカムカしながら家に帰った、という意味。「歸」は「歸」の古字。常用漢字「帰」は「歸」の略字。○欺 [qī] = 侮る、馬鹿にする、みくびる、輕蔑する。「欺負 [qīfù]」と同意。○纔是 [cái shì] = (そうして) はじめて正しい、(それで) やつと本来あるべき姿である。現代中国語「才是」と同じ。左訓「ソコデヨヒ」。○歇後語 [xiēhòuyǔ] = 後に続く言葉を省略して、続きの言葉を考えさせる、一種の言葉遊び。例えば、「孔子搬家 [Kǒngzǐ bānjiā] (孔子が引っ越しをする)」と言えは、「尽是書 [jìn shū shù] (家じゅう書物ばかり)」という言葉が続く。この「尽是書 [jìn shū shù]」が「尽是輸 [jìn shū shù]」と同音のため、「いつも勝負に負ける」意を表す、といったもの。ただし、ここでは後に続くべき「生」の一字が抜けていることを指摘したもの。「老先」という言い方を知らない庶民の無知を笑っている。左訓「ヒツキリコトハ」(引っ切り言葉)。「引っ切り言葉」とは、「後に続く語を引きちぎった言葉」という意味。○係 [xi] = 「是 [shì]」と同じ。肯定の強調を表す。ゝなのである、まさしくである。訓読語の「かかる」とは少しずれる。○失了便宜 [shī le biányi] = 失了便宜 [shī le biányi] (うまい汁を吸う、得をする)の対義語。「[le]」は、動詞の後に付けて、動作が完了したことを表すアスペクト助詞。左訓「テハツトリウシナハス」(手筈、取り失はぬ)。○老父母 [lǎofùmǔ] = 「旦那様」「お代官様」という意味。県知事に対する尊称。「縣父母 [xiànfùmǔ]」「老父台 [lǎofùtái]」とも言う。左訓「ラブリヤウ」(御奉行)。○縮住 [suō zhù] = 縮める。「住」は、動詞の後に置かれ、動作の結果が安定、定着するニュアンスを添える結果補語。現代中国語と同じ。左訓「チ、メテ」(縮めて)。○聲 [shēng] = 音や声が出される回数を表す量詞(助数詞)。「一聲」の「一」が省略された形。「聲」は「声」の正字。左訓「ヒトコエノ」(一声の)。「老父 [lǎofù]」(自分の)父、父親。他人に対して自分の父親を呼ぶときに用いる語。

補注

この話は、『笑府』巻一（第一九話「封君」）、『絶纓三笑』巻二時笑・外語八八（第一七八話「封君」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、三〇～三一頁）を参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。『笑府』および『絶纓三笑』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と比べれば、文末に編者のコメントが附されている以外は、ほぼ同文である。『絶纓三笑』のコメント部分には、拙訳を添える。

『笑府』第一九話（巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、八丁表～裏）

封君

有市井獲封者。初謁縣官。踟躕甚。堅辭上坐。縣官曰。叨為令郎同年。理還該侍立。乃張目問曰。你也是屬狗的麼。

又一人與縣官同坐。方揮扇。適茶至。藏扇不迭。遽挿之衣領内。縣官大笑。

『絶纓三笑』第一七八話（巻二、時笑・外語八八、東京大学文学部蔵本、四八丁裏～四九丁表）

封君

有市井獲封者。初謁縣官。踟躕甚。堅辭上坐。縣官曰。叨為令郎同年。理還該侍立。乃張目問曰。你也是屬狗的麼。

又一封君見縣官。方揮扇。茶至。藏扇不迭。遽挿之衣領内。又一封君見縣官。茶至。各執其一。官以己手者奉之。封君受之。遂手執二。而不知所措。縣官大笑。此皆實事也。

（編者のコメント）また、ある「封君」が県知事にお会いすることになった。ちやうど団扇を使っているところへ、お茶が運ばれてきた。団扇を隠す

暇がなかったので、慌てて襟のなかに差し込んだ。（訳者注、『笑府』原文は、この後に「縣官大笑（県知事は大いに笑った）」と記す。）また（他にも次のような話がある）、ある「封君」が県知事にお会いすることになり、お茶が運ばれてきた。二人はそれぞれ一つずつお茶を手にした。県知事が自分のお茶を「封君」に差し出すと、「封君」はそれを受け取り、二つの湯飲みを両手に持つことになってしまい、もはやどうしたらいいかわからなくなってしまう。そこで県知事は大笑いをしたという。これらはすべて実際にあった出来事である。

余説

本話は、士大夫たちの常識を知らない一般庶民の無知を笑った話である。

県知事は、「同期の桜」という意味で「同年」という語を使用しているのだが、一般庶民の父親は、それを文字通りに「（息子と）同じ年に生まれた（若輩者）」と誤解してしまった、というもの。今となつては、この程度の笑い話は、それほど面白くないかもしれない。

ただ、『絶纓三笑』に附された編者のコメントに、「此皆實事也（これらはすべて実際にあった出来事である）」とある。県知事と「封君」との間に交わされたこのやりとりは、清代中国における実話であつたというところに注目したい。実話には、歴史的事実としての重みがあるからである。

⑤4 老父（おとう（さま））

原文

老父

一市井受封者。初見縣官。以其齒尊。稱之曰。老先生。其人含怒而歸。子問其故。曰。官欺我太甚。彼該稱我老先生。纔是。乃作歇後語。叫甚麼老先。明係輕薄。我回稱也。不曾失。便宜。子詢何以稱呼。曰。我本應稱他老父。母。今亦縮住。後韻。只叫他聲。老父。

まず初めに、その気取った服装がみつともないことを言い（第一、二句）、次に、学もないのに試験監督や学問上の儀式に参列することの愚を笑い（第三、四句）、草葉の陰で（人格者である孔子先生だけは笑っているが）、顔淵は嘆き、子路もカンカンに怒っていると言う（第五、六、七句）。そして子路が怒っているそのわけは、「武拳」出身の武官は（学問がないばかりか）、根性もないために、軍人としても使い物にならないからだと結んでいる（第八、九、十句）。

⑤3 封君（息子が立身出世したおかげで天子から恩典を授けられた父君）

原文

封君
キフダイシキヒトノオヤ

有_二市井_一封_レ者_一。初_ニ見_二縣官_一。甚_ニ跼_一躅_一、堅_ク辞_二上_一坐_一。官曰。叨_ニ為_二令郎_一同年_一。論_レ理_一還_レ該_一侍坐_一。封君乃張_ツ目問曰。你_モ也_レ是_レ属_二狗_一的麼_一。

「同年登_一科_一。相呼_テ為_二同年兄_一。市井不_レ知_二為_二何_一ノ義_一。以為_二同年_一生_二的_一。」

狗兒。凡_ニ調_二呆秀才_一語。故_ニ有_二此_一機_二味_一。」

書き下し文

封君

市井_一封_レを獲_レる者_一有_リ。初_ニめ_一て_二県官_一に_二見_レえ_一。甚_ニだ_一跼_一躅_一、堅_ク上_一坐_一を辞_スす。官_一曰_ク。叨_ニり_一に_二令郎_一の_二同年_一と_二為_レる_一。理_一を論_スすれば_二還_レ侍坐_一すべし。封君乃_一ち_二目_一を張_ツつて_二問_フて_二曰_ク。你_モも_一也_レ是_レ狗_一に_二属_スるか_一。

「同年_一登_レ科_一すれば_二相呼_テて_二同年兄_一と_二為_スす_一。市井_一何_ノの義_一為_レるか_一を_二知_ラず_一。以為_二ら_一く_二同年_一に_二生_スずと_一。狗兒_一は_二凡_ニそ_一呆秀才_一を_二調_スずる_一語_一。故_ニに_二此_一の_二機_二味_一有_リ。」

現代語訳

一般の庶民でありながら、息子が偉くなったおかげで、天子の恩典を受けた父君が、初めて県知事にお目に掛かることになった。ところが、父親は恐縮のあまり、あくまでも上座に腰を下ろすことを辞退した。知事は言った。

「ありがたいことに、息子さんとは同年の誼、道理から言っても、やはり私が下座

に座るべきなのです。」

すると、父君は目を見張って、こう訊ねた。

「えっ、あなたも（息子と同じ）成年生まれなのですか（あなたはまだ、そんなに若かったのですか）。」

【和刻本割注】 同_二年_一に科挙試験に合格した者は、お互いに「同年兄」[tongnian xiong]（同期の桜）」と呼び合う。ところが、一般庶民にはそういうことが分からないため、（県知事が口にした）「同年」という言葉を「同_二年_一に生まれた」という意味だと勘違いしてしまったのである。また、「狗兒」[gǒu'ér]（ちびイヌ）」とは、総じて「馬鹿な秀才（秀才）は科挙試験の合格者を言う」をからかうときに用いる語であるため、このような滑稽味が出ているのである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一七丁裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第二八話、七丁表）。○封君 [fēngjūn] = 清代の中国では、子や孫が高位高官になると、天子より封典を贈られた。そのような恩典を受けた父祖を「封君」という。左訓「キフダイシキヒトノオヤ」（及第した人の親）。○市井 [shìjǐng] = 一般庶民、町なかに住む人たち。左訓「マチノモノ」（町の者）。○縣官 [xiànguān] = 県知事。「縣」は「県」の本字。○跼躅 [júzhú] = びくびくする、縮こまる、怖じ気づく。○叨 [tāo] = 忝くもくを被る。恩恵を受ける。和訓「みだりに」。○還 [hái] = やはり。現代中国語と同じ。和刻本は「ナホ」と右傍訓を添える。○該 [gāi] = なくてはならない。「のはずである」という意味の助動詞。現代中国語「该 [gāi]」「应该 [yīnggāi]」と同じ。左訓「ハツ」（はづ）、右傍訓「ヘシ」（べし）。○属狗 [shǔgǒu] = 成年生まれである。中国では、今でも年齢を言うのと同じ感覚で、このように生まれの干支を言う。この父親は、県知事が自分の息子と同年だと勘違いしたのである。勘違いの原因は、遠山荷塘の文末割注に詳しい。○機味 [jīwèi] = 味わい。通常は「滋味 [zīwèi]」と言う。「機 [cǐ]」は、「養」（餅の意）の俗字。ここでは、「滋 [zī]」の宛字として用いられているのであろう。

【和刻本割注】「屣」という字は、発音は「屣 [liao]」であり、意味は「屣」(男性生殖器)と同じである。

【訳者注】この「詩」は、第二、三、四、六、八、十句で押韻している。韻字は「皂 [zào]」「考 [kǎo]」「廟 [miào]」「笑 [xiào]」「屣 [liao]」「料 [liào]」。ただし、平水韻ではなく、清代の中国口頭語による、ゆるい押韻であろう。また、第二句と第二句(頭戴銀雀頂、脚踏粉底皂)、第三句と第四句(「也去參主考、也來謁孔廟。」)、第五句と第六句(「顏淵喟然歎、夫子莞爾笑。」)は対句仕立てになっているが、詩の体裁を整えているとまでは言いがたい。詩の体裁を整えるべく、押韻・対句を意識しながら、無理に五言の十句に仕立て上げたもの、というべきであろう。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・古艶部(一七丁表裏)。『新鐫笑林広記』卷之一・古艶部(第二七話、六丁裏)。○武舉 [wǔjǔ] = 科挙制度における「武官」登用試験に合格した人のこと。武術のテストで合否が決まるため、「文官」ほどの知識はない。『水滸伝』では、楊志が武挙出身の人物として登場する(第二二回「楊志慕道。小人應過武舉出身。」(楊志は(梁中書の質問に対して)「わたくしは、武挙の試験に合格しております(後略)」と答えた。(拙訳))。○銀雀頂 [yínquēdǐng] = 清代の中国において、科挙に合格した人(「挙人」「生員」「秀才」という)が頭につけていた冠の飾り。金銀細工による雀のデザインが施されていた(「清会典・礼部五・官員士庶冠服」)。左訓「キンノス、メノカザリツキ」(銀の雀の飾り付き)。○粉底皂 [fēndǐ zào] = 底の白い、黒い靴。「粉底皂靴」とも言う。『儒林外史』第二回では学者風の人物の履いている靴、「金瓶梅」第五九回では西門慶の履いている靴が「粉底皂靴」とされる。左訓「ソコジロノクツ」(底白の靴)。○主考 [zhǔkǎo] = 試験を主催し監督する。左訓「シラヘニデル」(調べに出る)。和刻本『訳解笑林広記』においては、「シラベ」は「(試験の) 審査をする」意で用いられている(「考(シラベヤク)」(巻上、四丁裏)、「三考(三トウリノシラベ)」(巻上、一五丁裏)、「及第(オシラベ)」(巻上、一七丁表)、「入場(シラベニデル)」(大腸(ホンシラベノコト)」(巻上、一九丁表))。○孔廟 [Kǒng miào]

○孔子廟。学問の神様である孔子が祭られている場所。○顔淵喟然歎(孔子の一番弟子であった)顔淵は大きな溜息をついて嘆いた。『論語』子罕篇に「顔淵喟然歎曰。仰レケハ之ヲ彌高。鑽レハ之ヲ彌堅。」(顔淵喟然として歎じて曰く之を仰ば弥高し之を鑽ば弥いよ堅し)(『經典余師(論語)』天明六年(一七八六)刊、卷二、三四丁表)とある。顔淵は、孔子先生があまりにも偉大すぎるので、大きな溜息をつきながら愕然としているのである。○筮爾 [wǎn'ěr] = 莞爾 [wǎn'ěr]、にっこりと。和刻本は「筮爾 [gǎn'ěr]」に作るが、中国原本により改めた。「筮」は「管」の異体字であり、「筮」や「莞」とは別字である。○子路 = 孔子の弟子。乱暴者として名高い。『論語』述而篇に「子路曰子行三三軍則誰ト與」(子路曰く子三軍を行はゞ則はち誰ト與にせん)(『經典余師(論語)』卷二、一三三丁表)とある。「軍隊を率いる場合、先生は誰と一緒に行動なさいますか」という子路の質問に対して、孔子は「向こう見ずで無鉄砲な奴(つまり子路のような男)とは行動を共にしない」と答えている。○愠 [yùn] = 憤る、恨む、怒る。『經典余師(論語)』や『四書集注』(元禄五年(一六九二)和刻)では、通常「いきどほる」と訓ずる。○這般 [zhèbān] = このよう(古白話)。

○猥狗 [dǎi gǒu liào] = 「猥」は「愚鈍である」「まぬけである」意の形容詞、「狗」は人を罵る言葉(畜生)、「猥」は「男性生殖器」が原義(「屣」「屣」であるが、「狗」と同様に罵詈雑言として用いられる。左訓「バカモノメ」(馬鹿者め)。○三軍 = 大國の軍隊。周制においては、天子は六軍、諸侯の大なるは三軍を擁したと言う。ここは、前出の『論語』述而篇「子路曰子行三三軍則誰ト與」を意識した表現であろう。○馬料 [mǎliào] = 馬の飼料、馬のエサ。「喂馬料」は「馬のエサをやる」意。「喂[weì]」は、動物にエサをやる、食わせる意の動詞。訓読語の「かふ」は「動物に(エサをやる)意。和刻本の施訓「喂[カフ]馬料」には無理があるため、私に書き下し文を改めた(「喂[カフ]馬料」)。

補注

この風刺詩は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などには見えない。

余説

本話は、「武挙」出身の役人をからかった風刺詩である。

『訳解笑林広記』全注釈(五)

川上 陽介(工学部教養教育)

序

本稿は、『訳解笑林広記』全注釈(一)、『富山県立大学紀要』第二六巻、二〇一六年三月)、『訳解笑林広記』全注釈(二)、『富山県立大学紀要』第二七巻、二〇一七年三月)、『訳解笑林広記』全注釈(三)、『東アジアの古典文学における笑話』、新葉館出版、二〇一七年一〇月)、『訳解笑林広記』全注釈(四)、『富山県立大学紀要』第二八巻、二〇一八年三月)の続稿である。前稿に引き続き、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』(文政十二年(一八二七)刊、半紙本二巻二冊、全三〇五話)第五二話から第六七話までの日本語訳と注釈を掲載する。

和刻本『訳解笑林広記』及び中国笑話関連資料の諸本、底本、凡例等については、第一稿を参照して頂きたい。『富山県立大学紀要』所収の論稿は、すべてWebによる閲覧が可能である。

⑤2 嘲武挙詩(「武官」登用試験に合格した役人を嘲る詩)

原文

嘲武挙詩

頭戴銀雀頂。脚踏粉底皂。也去參主考。也來謁孔廟。
顏淵喟然歎。夫子箴爾笑。子路慍見曰。這般獸狗。我若行三軍。
都去喂馬料。〔唇音瞭義同〕

書き下し文

武挙を嘲る詩

頭に銀雀頂を戴き。脚に粉底皂を踏み。也去て主考に参ず。也來て孔廟に謁す。顏淵喟然として歎じ。夫子箴爾として笑ふ。子路慍り見て曰く。這般の獸狗。我若し三軍を行らば。都去て馬料を喂はせん。〔唇音、義同〕

現代語訳

頭には、ギンギラギンのスズメのプローチ(頭戴銀雀頂)、
足下には、靴底が白い黒ブーツ(このみっともない姿こそ、「武官」様の晴れ姿)(脚踏粉底皂)。

(よせばいいのに) 科挙の試験監督にもひよいひよい出かけ(也去参主考)、
(学問の神様を祭った) 孔子廟にも顔を出す(学もないのに、身の程知らず)(也來謁孔廟)。

(孔子廟では、おそらく草葉の陰で、孔子門下随一の頭腦の持ち主であった) 顏淵が(なんて知的レベルの低い奴だと) 大きな溜息をついて嘆くだろうが(顏淵喟然歎)、
(人間のよくできた人格者である) 孔子先生は、にっこりニコニコと笑うだろう(夫子箴爾笑)。

(しかし乱暴者の) 子路ならば、カンカンに怒り狂って、こう言うだろう(子路慍見曰)。
この、うすらトンカチのストコドコイ(這般獸狗)。

俺がもしも大軍を率いるならば(我若行三軍)、
こいつら全員(役立たずだから)、馬のエサやりにでも行かせてやるべえ(都去喂馬料)。